

市内遺跡調査概報XI

—— 平成12年度 東木津遺跡の調査 ——

2001年 3月

高岡市教育委員会

序

高岡市の歴史は、遠く旧石器時代からはじまることが確認されています。そしてその営みの継続された結果、市内のいたる所には、祖先の残した多数の埋蔵文化財が所在しております、教育委員会でも、長年これに対する保護活動を行ってまいりました。

今回報告しますのは、個人住宅等の開発行為に対して実施した、平成12年度の本調査や試掘調査の概要です。本調査を実施しました「東木津遺跡（山崎地区）」は、高岡市街地の南西郊外に立地する古墳時代前半から中世にいたる遺跡です。教育委員会におきましても、ここ数年は毎年のようにこの遺跡を調査していますが、過去の発掘調査において、古代の木簡などを出土したことから、この地には古代における公的施設の存在したことが判明しています。今回の発掘調査におきましても、官衙的な建物が検出されたほか、円面鏡をはじめとする多岐にわたる遺物が出土するなど、また一つ当地の歴史を知る資料が加わったものと思われます。

また、試掘調査ではありますが、「出来田南遺跡」におきましても、転用硯や墨書き土器のほか、掘立柱建物などが検出されたことから、ここでも古代における公的施設の存在した可能性が高まってまいりました。

本書を、郷土の歴史の究明や学術研究にお役立ていただければ幸いです。

末尾になりますが、調査の実施にあたり、各関係機関や地元の皆様には、多大なるご理解とご協力をたまわりました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成13年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

例 言

1. 本書は、個人住宅等の建設に伴い実施した、高岡市内の遺跡の発掘調査概報である。
2. 当調査は、平成12年度国庫補助金の交付を受け、高岡市教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載する調査地区は、本調査1件と試掘調査19件の計20件である。
4. 調査関係者は次のとおりである。

文化財課長： 宮村勝博
課長補佐： 大石茂
主任幹： 天谷隆夫
課員： 山口辰一、根津明義、荒井隆、太田浩司
5. 本書に掲載した、東木津遺跡にかかる現地調査及び整理・概報作成業は根津が行い、その他の遺跡については太田が担当した。
6. 現地調査及び報告書作成においては、以下の各氏から指導・協力を得た。(五十音順、敬称略)

岡本淳一郎 久々忠義 栗山雅夫 鈴木景二 田中明
7. 本書における遺構の種別は、下記に示す記号を用いた。

S B——掘立柱建物、 S D——溝状遺構、 S K——土坑、 S X——その他の遺構
8. 本書における東木津遺跡の遺物番号は次のとおりである。

1101～古代須恵器・蓋 1201～古代須恵器・杯 1401～古代須恵器・壺
1501～古代須恵器・甕 1601～古代土師器・杯類 1701～古代土師器・甕類
1801～円面鏡、灯明皿など 1901～株洲焼 2101～古墳時代・高杯、器台
2201～古墳時代・蓋 2301～古墳時代・壺 2401～古墳時代・甕
9. 当調査の調査参加者は下記のとおりである。(五十音順、敬称略)
 - ・屋外調査

池田昌美 遠藤淳 藏田幸太郎 小塚久美 柴田優 田所人志 塚原望 道苗百合
中田郁子 中田俊男 島志佳子 前田節子 増山真由美 吉田仲
 - ・室内整理調査

池田昌美 岩坪修三 遠藤淳 小塚久美 柴田優 苫野由美 田所人志 田中美穂子
塚原望 道苗百合 中田郁子 中村順子 島志佳子 藤井美紀 前田節子 増山真由美

目 次

東木津遺跡 山崎地区

序 説	1
遺 構	2
出土遺物	7
結 語	11

東木津遺跡 丹羽地区

序 説	13
遺 構	14
出土遺物	16
小 結	17

出来田南遺跡 黒川仏壇店地区

遺跡概観	21
基本層序	21
調査概要	21
調査結果	22
挿 図	22

その他の試掘調査

東木津遺跡 西本地区	31
東木津遺跡 諸橋地区	32
東木津遺跡 善田地区	33
中曾根西遺跡 稲垣地区	34
五十里西遺跡 谷口地区	35
藏野町遺跡 武田工務店地区	36
上二上遺跡 森地区他	37
越中国府閻連遺跡 山地区	38
出来田南遺跡 南地区	39
越中国府閻連遺跡 塙地区	40
越中国府閻連遺跡 寺嶋地区	41
鷺北新遺跡 サンバリー高岡病院地区	42
岩坪岡田島遺跡 三芝硝材地区	43
戸出光明寺東遺跡 石倉地区	44
中曾根北遺跡 野村地区	45

越中国府関連遺跡 林地区	46
麻生谷遺跡 前野地区	47

図 版 等

挿 図

第1図 東木津遺跡・遺跡周辺図	1
第2図 東木津遺跡 山崎地区・調査区全体図	4
第3図 山崎地区出土「口万呂」墨書き土器	10
第4図 東木津遺跡・調査区周辺図	13
第5図 東木津遺跡 丹羽地区・調査区周辺図	15
第6図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・調査区周辺図	21
第7図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・出土「酒麻呂」墨書き土器	22
第8図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・出土「刃」墨書き土器	22
第9図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・出土「酒麻呂」墨書き土器(赤外線投影写真)	22
第10図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・出土「刃」墨書き土器(赤外線投影写真)	22
第11図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・遺跡周辺図(米軍空中写真)	23
第12図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・遺跡周辺図(国土地理院地形図)	24
第13図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・遺構検出状況図(高全景写真)	25
第14図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・遺構図(1/100)	26
第15図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・等高線図(1/100)	27
第16図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区・大和ハウス地区・遺構図(1/800)	28
第17図 東木津遺跡 西本地区・遺跡周辺図	31
第18図 東木津遺跡 諸橋地区・遺跡周辺図	32
第19図 東木津遺跡 曽田地区・遺跡周辺図	33
第20図 中曾根西遺跡 稲垣地区・遺跡周辺図	34
第21図 五十里西遺跡 谷口地区・遺跡周辺図	35
第22図 蔵野町遺跡 武田工務店地区・遺跡周辺図	36
第23図 上二上遺跡 森地区他・遺跡周辺図	37
第24図 越中国府関連遺跡 山地区・遺跡周辺図	38
第25図 出来田南遺跡 南地区・遺跡周辺図	39
第26図 越中国府関連遺跡 堀地区・遺跡周辺図	40
第27図 越中国府関連遺跡 寺島地区・遺跡周辺図	41
第28図 鶴北新遺跡 サンパリー高岡病院地区・遺跡周辺図	42
第29図 岩坪岡田鳥遺跡 三芝硝材地区・遺跡周辺図	43
第30図 戸出光明寺東遺跡 石倉地区・遺跡周辺図	44
第31図 中曾根北遺跡 野村地区・遺跡周辺図	45
第32図 越中国府関連遺跡 林地区・遺跡周辺図	46
第33図 麻生谷遺跡 前野地区・遺跡周辺図	47

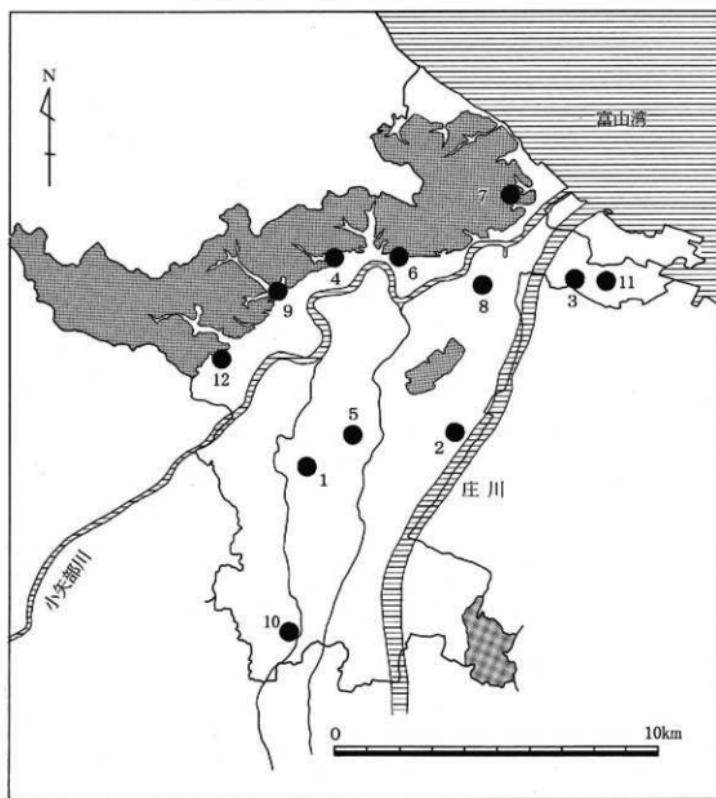
遺物実測図

図面101	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・蓋
図面102	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・蓋
図面103	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・蓋
図面104	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・杯
図面105	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・杯
図面106	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・杯
図面107	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・杯
図面108	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・杯、椀
図面109	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・杯
図面110	東木津遺跡	山崎地区	古代	土師器・杯、皿など
図面111	東木津遺跡	山崎地区	古代	土師器・甕、鉢
図面112	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・壺
図面113	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・壺
図面114	東木津遺跡	山崎地区	古代	須恵器・大甕
図面115	東木津遺跡	山崎地区	古代	墨書き土器、円面鏡など
図面116	東木津遺跡	山崎地区	古代	ヘラ記号、灯明皿
図面117	東木津遺跡	山崎地区	古墳時代	須恵器、杯身、土師器、蓋形土器、高杯、器台
図面118	東木津遺跡	山崎地区	古墳時代	土師器・壺、鉢など
図面119	東木津遺跡	山崎地区	古墳時代	土師器・甕
図面120	東木津遺跡	山崎地区	古墳時代	土師器・甕
図面121	東木津遺跡	山崎地区	中世	珠洲焼・すり鉢、大甕
図面122	東木津遺跡	丹羽地区	古代	須恵器・蓋、杯、墨書き土器など
図面123	東木津遺跡	丹羽地区	古代	須恵器・杯、壺
図面124	東木津遺跡	丹羽地区	古代	土師器・杯、椀、甕
図面125	出来田南遺跡	黒川仏壇店地区	古代	須恵器・蓋、杯 土師器・杯など
図面126	出来田南遺跡	黒川仏壇店地区	古代	須恵器・壺、玻璃など

遺構・遺物写真等

図版201	東木津遺跡	山崎地区
図版202	東木津遺跡	丹羽地区
図版203	東木津遺跡	諸橋地区
図版204 ~ 図版210	出来田南遺跡	黒川仏壇店地区
図版211 ~ 図版224	各試掘調査概要	
図版225	出来田南遺跡	黒川仏壇店地区・出土遺物写真
図版226	出来田南遺跡	黒川仏壇店地区・出土遺物写真

本書掲載遺跡位置図（平成12年度）



東木津遺跡（山崎地区）

序 説

遺跡概観

「東木津遺跡」は、JR高岡駅から南西3kmの地点にあたる高岡市佐野地区に位置する。この周辺は、往古の庄川が形成した扇状地の末端部にあたり、標高11~12mの微高地となっており、木津神社遺跡の他、西木津遺跡、泉ヶ丘遺跡、下佐野遺跡などが所在する。これらは主に弥生時代から中世にいたるまでの遺跡である。

なお、現状では、これらの遺跡は単体の埋蔵文化財包蔵地として周知されているが、各遺跡からの出土遺物や遺跡の年代などには共通点もみられることから、本来的には広範囲に及ぶ单一の遺跡であった可能性も秘められている。

東木津遺跡は、これまでの発掘調査により、奈良時代から平安時代までの様相を中心とする遺跡として周知されてきた。これまでの成果についても、平成9年度の調査で朱文鏡を検出したことを皮切りに、平成10年度や11年度の調査では、官衙的な建物群が検出された他、木簡や墨書き器といった文字史料なども検出されている。木簡については、未記入のものも検出されたことから、この地では木簡を作成するような文書活動が存在したことも確認されている。また「宅」という墨書の存在からは、実際に文書活動を行っていた施設がこの地に存在していたことも窺われる。

なお、墨書については、上記の他にも「悔過」という仏教用語も検出されており、この遺跡が仏教色を帯びていた可能性も考慮されている。



図1. 遺跡周辺図（調査区は図4を参照）

調査にいたる経緯

平成12年4月に、高岡市佐野889-1 の地に『山崎モータース自動車整備工場』を建設するにあたり、施工主の山崎芳彦氏から、埋蔵文化財の取り扱いについて照会がなされた。

照会のあった地点は、東木津遺跡の埋蔵文化財包蔵地として周知されていた上、平成10年度の試掘調査によって官衙的な建物跡などが確認されていたため、当該地についても地下の埋蔵文化財を保護する必要性が発生した。

その後、同氏と高岡市教育委員会文化財課及び富山県教育委員会との間で行われた協議の結果、平成12年6月から上記の建設予定地の調査を国庫補助にて行う了承を得るに至った。

屋外における発掘調査は、平成12年6月12日から同年8月11日まで実施した。表土の除去はバックフォーで行い、その後は速やかに手作業による遺物包含層の掘削の他、遺構の確認、掘削、記録などの一連の作業を行った。調査対象面積は約900 m²、発掘調査面積は約700 m²である。

グリット

今回の調査区のグリットは、過去の調査区との照合をはかるため、それらと同軸のものを当調査区にまで展開させることとし、基本的に一辺10m四方を一区画とするメッシュとして表示した。

具体的には、平面直角座標系の第Ⅵ座標系（原点は北緯36°、東經137°10'）に合わせ、東西をX軸、南北をY軸とし、さらにグリットの南西隅の数値がそのグリットを表すよう設定した。X=1、Y=1の位置は、原点より西へ15.260m、北へ80.635m向かった位置である。

遺構

今回の調査区からは総数約150 基もの遺構を検出した。これらは年代別に、古墳時代、古代、中世及びそれ以降の4類に分けられるが、数量的な面からみれば中心となるのは古代である。

なお、掘立柱建物等の掘方の深さを拘束するに、今回の調査区はかなりの深さまで後世の削平を受けたことが考えられ、これに伴い遺構確認面よりも上位の層は表土化しているものとみられる。また、遺構が多数に及ぶため、全ての遺構を解説することはできないが、以下では検出された遺構のうち、主となるものを解説していくこととする。

古墳時代

S X 0 1

今回の調査区からは、古墳時代前葉から中墳にかけての遺物が多量に出土しているが、確実にこの時期に対応するのはS X 0 1とした1基のみである。

この遺構は、調査区の東側に位置する南北方向の構造遺構であり、遺構の南側は調査区外に延長してい

るが、隣接する「道路地区」では検出されていない。

遺構断面は、緩やかなU字形又は皿形を呈している。覆土は概ね2層に分層でき、上層は黒褐色粘質土で、下層はやや灰褐色を呈した粘質土を基本とするが、一部に砂質土が加わる土層が約10cm程度堆積している。古墳時代前葉から中頃にかけての遺物が出土しており、遺構の年代についてもこれ以降であることが窺われる。

古　　代

掘立柱建物　S B 0 1

調査区中央の、やや西側から検出されたものである。後世の削平により5基の掘方が現存するのみであったが、2間(4.95m)×2間以上の側柱構造を呈するとみられる掘立柱建物である。

掘方は一辺70~90cmほどの方形を主とする。出土遺物がないため建物の年代は不明であるが、周辺からは8世紀中頃から9世紀代の遺物が出土しており、この年代におさまる可能性を考慮しておきたい。

掘立柱建物　S B 0 2

調査区の東端から、建物の一部が検出されたものである。検出された掘方は計4基であり、2間(4.7m)×2間以上の側柱構造を呈するとみられる掘立柱建物である。

確認された掘方は、外見上はやや大型のものとなっているが、これは後述するS B 0 3の掘方や掘り抜き穴が重複するためである。年代を特定するだけの遺物が出土していないため、建物の年代も判然とはしないが、上記S B 0 1と同様、8世紀中頃から9世紀代までの年代を考えておきたい。また、全ての掘方がS B 0 3のそれに切られているため、本址はS B 0 3よりも古いことが判明している。

掘立柱建物　S B 0 3

調査区の東端において、上述したS B 0 2と切り合う状態で検出された建物である。上述のように、本址がS B 0 2よりも新しいものとみられるが、同位置に建て直されていることを鑑みれば、S B 0 2と近い年代が考慮される。

なお、両棟とも未確認部分は調査区外へと達するが、その位置は、試掘調査時に3間×2間の縦柱建物などを確認した部分にさしかかるため、この付近における建物の切り合い関係や組立については、再検討の必要性が浮上したものと思われる。現状では資料不足のためこの答えは出せないが、将来この地が本調査される機会に柱根の位置を確認するなどした上で、この課題に取り組むこととしたい。

溝　S D 0 1(西側)及びS D 0 2(東側)

調査区の南側において、同様な形状と方位を呈する2条の溝状遺構が検出されている。これらは共に逆台形の断面形を有する他、黒褐色の覆土を呈するなど、幾つかの点で共通するところがあるが、明らかな土壙状の断絶があるため、ここでは機械的に2条の溝状遺構とみなし整理するものである。

この中に包含される遺物は、両遺構とも8世紀後半代から9世紀初頭の年代を与えうるものであった。周辺に展開される官衙的な建物群との共存も考えられるところである。

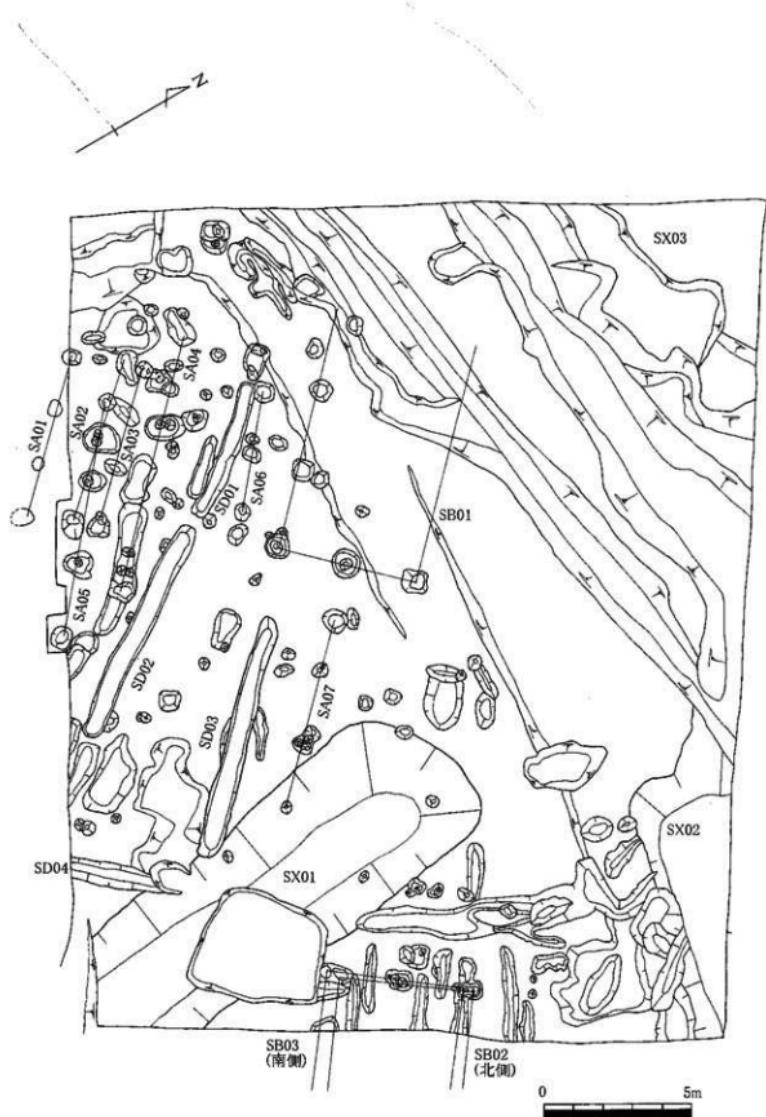


图2. 東木津遺跡 山崎地区・調査区全体図

溝 S D O 3

調査区の南側に位置し、概ね東西方向にはしる溝状遺構である。遺構の規模は全長8.5m、幅約70cm程度、遺構確認面からの深さは約40cmの規模を有する。

遺構の覆土は黒褐色を呈し、断面は逆台形状を呈する。また、8世紀後半から9世紀代の遺物が多量に出土しており、上記したS D O 1やO 2などと同様な特徴を有する。

なお、隣接するS A O 7とは同方位を呈する上、本遺構とS A O 7との距離間は、これより西側に位置するS B O 1とS D O 1との距離間とも近似するが、詳細については不明である。

溝 S D O 4

調査区の東側を概ね南北方向にはしる溝状遺構であり、10年度の「道路地区」からもこの延長部分が検出されている。確認された全長は合計38mにも達するが、さらに南方へと続き長距離化を呈するため、区画的な用途をもつ可能性も考慮しておきたい。

本遺構からは、8世紀後半から9世紀代の遺物が多量に出土している。周辺に位置する上記のS D O 3などとは約90°近く方位が異なるが、本址の遺構断面が浅いU字形を呈するなど、相異する面もある。

溝 S D O 5~12

S B O 2やO 3と同様な位置で検出された溝状遺構群であり、一案としては煩跡の可能性などが考えられるものである。遺構の規模はどれも大きな差異はなく、幅約30~40cm程度のものばかりである。10年度の試掘調査の際には、この東方からもこうした溝状遺構群が検出されている。

樁群について

今回の調査区の南端においては、多数のビットが検出されている。この地点については、試掘調査のおりに試験的に3条の樁として報告した経緯があるが、今回本調査を行い、各掘方を完掘したことによって、その平面形や底面の標高などを詳細に把握することができたため、以下では、新たに得られた知見をもとに再検討を加えた成果を提示する次第である。

樁 S A O 1

S A O 1としたものは、10年度の試掘調査時でも同名で呼称されていたものである。今回の調査では、そのうちの1基の掘方を検出したのみであったが、試掘時のとおりに復元しても他の樁と重複しないことから、試掘調査の成果を尊重し、改めてこの遺構番号を付して報告するものである。

この遺構は、直径約60cm程度の円形の掘方で構成される3間以上の樁である。一切の遺物が出土しなかつたため、遺構の年代は判然としないが、周辺における古代の建物と方位が概ね一致するため、古代に属する可能性が窺われる。

樁 S A O 2

試掘調査時に検出され、当初『S A O 2』と称されていたものの一部である。試掘調査の際には、8基

の掘方で構成されるものと仮定したが、今回の調査を踏まえ、改めて柱間の均一性や掘方の完掘時の状況などを考察するに至り、3基の掘方に共通点を見出すことができたため、これらで構成される2間の櫛として改めて報告するものである。

この遺構は、直径約80cm程度の円形の掘方で構成されるもので、覆土は黒褐色を呈している。出土遺物がないため年代は不明だが、他の古代の遺構と方位が一致するため、古代のものと勘案される。

櫛 S A 0 3

上記と同様、試掘を含む2度の調査によって検出された掘方群から幾つかを選び出し、今回改めて櫛として復元するものである。本址は今回の調査の結果を受けて、遺構の深さや幅などが共通する3基の掘方を選定し、これらで構成される2間の櫛として復元したものである。

この遺構は、直径約60cm程度の円形を基本とする掘方で構成されるもので、覆土は黒褐色に一部砂質土が含まれる。出土遺物がないため年代は把握できないが、周辺に位置する古代の建物と方位が一致することから、これらと同様の年代が勘案される。

櫛 S A 0 4

調査区の南端において検出されたもので、今回新たに櫛として復元したものである。周辺にはこれと同一線上に位置する掘方も他にあるが、遺構底面の標高や覆土の共通性から、4基の掘方で構成される3間の櫛と考えた。

出土遺物がないため、年代等は判然としないが、周辺に位置する古代の建物と方位が一致することから、これらと同様の年代が勘案される。

櫛 S A 0 5

本遺構は、試掘調査時の『S A 0 2』から3基の掘方を選定し、さらに他から1基を追加して、計4基で構成される3間の櫛と再確認したものである。

この遺構は、現状では一辺70~90cmの掘方で構成されるもので、覆土は黒褐色を呈している。周辺に位置する古代の建物と方位が一致することから、これらと同様の年代が勘案される。

櫛 S A 0 6

S B 0 1とS D 0 1との中间地点で検出されたものである。平面的には掘立柱建物の一部となるようにもみえるが、覆土の状況や断面形などから3基の掘方に共通性があるものと判断し、2間の櫛として復元したものである。出土遺物がないため年代等は判然としないが、周辺に位置する古代の建物と方位が一致することから、これらと同様の年代が勘案される。

櫛 S A 0 7

調査区の中央よりやや東よりの位置から検出された、4基の掘方で構成される3間の櫛である。出土遺物がないため年代等は判然としないが、周辺に位置する古代の建物と方位が一致することから、これらと同様の年代が勘案される。

溝状遺構 SXO 3

調査区の北東方向から南西へとはしるもので、平成10年度における「道路地区」の調査でも検出された大型の溝状遺構である。この遺構については、かつて古代に属する可能性を公表した経緯があるが、今回の調査により、その最下層から昭和初期の遺物を得たことから、ごく新しい時代の構であることが再認識された。ただし、覆土からは古代の遺物が多量に出土しており、今後も調査対象とする必要がある。

出土遺物

今回の調査区からは、調査面積の割には比較的多くの遺物が出土した。これらは、遺構確認面直上の整地層と、調査区の北西部をはしる近世以降の構から特に著しく出土した。

遺物は、古代から近世にいたる幅広い年代を呈するものが出土しているが、中でも8世紀中頃から9世紀代にいたる古代のものと、古墳時代初頭のものとでの圧倒数を占めている。これら全ての解説を掲載することは不可能だが、以下では、そのうちの主要となるものを記載していくこととする。

なお、第2章でも解説したように、今回の調査区は、後世の削半や攪乱などが相当の深さにまで及んでいるため、以下に記載する一部の遺物の年代については、慎重な対応をとったものがある。また、個々の遺物の規格等については、実測図をもって省略させていただくことをご了承いただきたい。

古墳時代

今回の調査区からは、古墳時代前葉から中頃にかかる時期のものがSXO 1から多量に出土している。これらの器種は、壺、甕、高杯、器台などであり、特に祭祀的なものばかりが見受けられるわけではないが、周辺の遺構の広がりなどを十分注意した上で遺構の性格などを検討していきたい。

壺

今回の調査区からは、20個体以上に及ぶ古墳時代の壺類が出土している。図版118に掲げたものは球形の胴部を有する比較的大型のものと、小型丸底土器の系統のものである。

前者については一応の図上復元が可能であったが、残存する部分はあまり多くはない。後世の磨耗により、器面の調整法などについては不明確な部分も多いが、内外面ともに刷毛目がみられ、内面にはナデがみられる。

後者については、大小等は様々であるが、一様に外面はナデ又は磨きが施されており、中には赤彩が施されたものもある。

甕

今回の調査区からは、少なくとも30個体以上にのぼる多数の古墳時代の甕が出土している。

後世の散逸や調査区が狭かったことなどが起因するのであろうが、ほとんどのものは細片であり、図版119などに掲げたものはそのうち比較的の接合の多くできたものばかりである。

一般的に、内外面ともに刷毛目がみられるが、後世の磨耗のため、器面の調整法などの判然としないものも多い。

高 杯

今回の調査区からは、少なくとも20個体以上に及ぶ古墳時代の高杯が出上している。後世の磨耗などがあるため、器面の調整法の判然としないものが多いが、確認される範囲では、一様にナデ又は磨きが施されており、約半数近くは赤彩が施されている。また、脚部には2~8箇所の孔が穿たれている。

器 台

今回の調査区からは、30個体以上の器台が出土している。他の器種と同様、後世の磨耗などがあるため、調整法の判然としないものが多いが、確認される範囲では、ナデ又は磨きによって最終的な調整がなされている。高杯と同様、これらのうちの約半数は赤彩が施され、脚部には2~8箇所の孔が穿たれている。

蓋形土器

今回の調査区からは、3個体の古墳時代の蓋形土器も出土している。図版117に掲載したのは、そのうち接合状況の良好な2点である。

他の器種と同様に後世の磨耗を受けており、器面の調整法については判然としないところもあるが、確認される範囲では、内外面ともに刷毛目などで調整を行った後に、ナデなどによって器面を整えられているが、内面については外面ほど丁寧に調整されておらず、一部に刷毛目を残す部分がある。

なお、掲載した2点のうちの2201には内外面に赤彩が施されている。

須恵器・杯身

調査区の表土より、1点だけ須恵器の杯身が出土した。その特徴から6世紀前半代のものと見受けられるが、他の検出物を鑑みるとかぎり、今回の調査区の様相との関連は薄いものと思われる。

ただし、周辺に位置する下佐野遺跡や石名瀬A遺跡などをはじめとする各地からは、同時代の様相が顕著に確認されていることから、今回のものは、こうした地点からの流れ込みであった可能性も考えられる。

古 代

本調査区からは、調査面積の割には比較的多量の古代の土器類が出土した。多くのものは遺構確認面直上の遺物を多く包含する整地層やS X 0 3から出土する傾向にあったが、これらは土師器や須恵器の食膳具が出土量全体の約97%を占める他、円面鏡や墨書き土器なども含み、概して官衙的な様相を呈している。今回の調査区は、平成10年度に木簡や官衙的な建物群を検出した調査区と隣接するが、今回の成果も同様に官衙的な様相を含んでいるものと思われる。ただし、東木津遺跡からは未だに灰釉陶器や綠釉陶器の出土はなく、9世紀後半代以降では官衙的な様相も薄らいでいくようにもとれる。

土師器

図版として掲載するに足るものは僅かであるが、当調査区からは比較的多量の土師器が出土している。これらのはほとんどは、遺物を多く包含する整地層からの出土であるが、後世の磨耗や破損が激しく、調整法の識別はおろか、接合さえも僅ならないものが多い。

確認される範囲では、杯A、杯B、碗などといった食膳具と、甕を中心とする煮炊具や灯明皿などが見られる。また、全体の年代幅としては、概ね8世紀後半から9世紀代までのものが検出されているが、むしろ上部器の場合は9世紀代以降の方が顕著となるようである。

須恵器

古代の土師器と同様、今回の調査区からは多量の須恵器が出土している。結果として今回は多くの図版を掲載することができたが、これは土師器に比べ須恵器の方が接合及び実測可能なものが多かったためであり、両者の出土量にはそれほど多くの差はない。

今回の調査区から出土した須恵器の器種については、杯Aや杯Bといった食膳具が圧倒数を占める傾向にあるが、この他にも大甕や鉢、それに蓋といった貯藏具に加え、円面鏡や転用鏡、灯明皿などといった文具等の出土もみられている。

調査区外の遺物の出土状況も考慮する必要はあるが、今回の史料を鑑みるとかぎりは、8世紀後半代から9世紀前葉までのものが顕著に出土している。

円面鏡

当調査区中央部からやや西側の黒色土からは円面鏡が2個体出土している。このうち図版115の1804としたものは、やや軟質なものではあるが、列点によって脚台部に文様が施されているものである。脚台部から縁までの一部分しか検出されていないため、全体の形状や文様などには不明な点も多い。

一方、図版115の1805としたものは、上記のものとは違い硬質な仕上がりとなっている。こちらは鏡面部のみの検出であり、脚台部については僅かな部分しか窺い知ることはできないが、若干の線刻と10箇所に及ぶと考えられる窓が確認されている。

なお、当遺跡からは、これで計4個体の円面鏡が出土したことになるが、いずれも当調査区周辺を中心とする地区からの出土ということになる。ちなみに、平成11年度の「チックタック地区」と今年度に調査を行った「丹羽地区」では、底のつく官衙的な建物が計3棟ほど検出されており、これらを考慮に入れるならば、おそらくこの周辺の地点は、当遺跡の中心地となるのではないかと思われる。

転用鏡

当調査区内からは、上記の円面鏡の他に6個体ほどの転用鏡が検出されている。使用される器種は、須恵器の杯B蓋と杯Bであるが、前者は5個体であるのに対し、後者は1個体であった。これらの年代については、8世紀後半から9世紀前半の範疇に属するものとみられる。

円面鏡と同様に、当調査区を中心とする周辺に転用鏡の出土も集中する傾向にあり、周辺の遺構群との関連が注目される。

灯明皿

当調査区内からは、約30個体に及ぶ灯明皿が検出されている。使用される器種は、須恵器の杯や土師器の皿、椀、それに杯といったものである。これらは細片が多く、明確に年代等を示すことはできないが、転用碗などと同様に、この出土は当調査区周辺に集中する傾向があるようである。

墨書き土器 ——「口万呂」

調査区中火部の、比較的多くの遺物を包含している黒色土器（整地土層）から出土した、8世紀後半代の須恵器の杯Bの底外面に図3のような墨書きが書かれているものである。

赤外線投影の結果、二つの文字の記載されていることが確認され、人名が書かれていることが判明したが、最初の文字についてはやや不鮮明であり、幾つかの候補が考えられる。

ただし、今回の調査区と隣接する平成10年度の調査区からも8世紀後半代の土師器から「達」、又は「達万呂」と解された墨書きが検出されており、これらと同一人物をあらわす可能性も検討したい。

赤彩土器

本調査区からは、数個体分に及ぶ赤彩土器が出土している。器種は杯や椀といったものであるが、いずれも細片であるため、型式や年代などは判然としないものが多い。

内面黒色土器

本調査区からは数個体分の内面黒色土器も出土している。後世の破損や磨耗のためか、内面に磨きを残すものと、これが見受けられないものがある。

接合が確認ならないため、年代の不明なものが多いが、器種には椀や杯といったものが認められる。

中　　世

珠洲焼

今回の調査区からは、細片ながら十数点に及ぶ珠洲焼や土師器といった中世の遺物も出土している。いずれも表上層の他、近世以降に埋没した溝から検出されたものである。

本調査区からは、十数個体の珠洲焼が出土している。器種は盃、甕、鉢又はすり鉢といったものである。確認される範囲では、14世紀から15世紀のものが見受けられる。

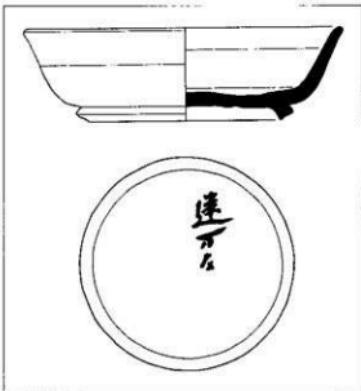


図3、「口万呂」墨書き土器(1/2)

結 語

平成12年度における、東木津遺跡山崎地区の発掘調査成果について概観した。今回の調査区は平成10年に試掘調査を行っており、すでに古代の建物群の拡がることが確認されていたが、本調査の結果、その建物数は更に増加することが判明したことや、S X O 1とした遺構から古墳時代の遺物が多量に検出されたことなどは、本調査ならではの成果と言えよう。

東木津遺跡は、既に過去数度にわたる発掘調査によって、木簡や帶金具（丸柄）をはじめとする多くの遺物が出土したことなどから、古代においては官衙的な様相の存在したことが確認されている。今回の調査区からも、山崎地区で円面鏡や転用鏡などの文具を出土し、また、丹羽地区からも庭を有する建物が検出され、周辺には官衙的な様相の中心的施設の存在することが改めて確認されることとなった。

東木津遺跡における古代の様相については、いまのところ明確な判断を下せる状況にはないが、周辺に位置する石塚遺跡などとの対比を行うことによって、或る程度までの色分けも見えてきているように思われる。石塚遺跡では、弥生中期から人々の生活が始まり、以降中世にいたるまで長期にわたる在地的で集落的な様相が確認されているが、一方の東木津遺跡では、8世紀中頃に成立し、遺跡の開始当初から官衙的な様相を呈して開始されることが確認されるなど、両者には存続年代と官衙的色彩の有無といった点で明確な相異が受けられている。

一案ではあるが、東木津遺跡は在地的な様相が周囲に存続する一方で、これと深い関連をもちつつも、律令期における何かの用途にしたがって非自然発生的に造営された存在だったのではないかとする意見も提示されている。ちなみに、東木津遺跡については、官衙的な様相を呈する上、仏教色を帯びていることや文献史学的な考察から、東大寺領根田荘に比定する一案がある。

ただし、歴史地理学的な考察では、この遺跡よりも南部に位置する高岡市十二町島や北巣新などの周辺地域をこれに比定する案もある他、いまのところ、当遺跡からは9世紀中頃までの遺物が顕著に出土するものの、この時期以降の官衙に特徴的な灰釉陶器や綠釉陶器といったものが検出されていないことを考慮するならば、必ずしも東木津遺跡をもって東大寺領根田荘とする説を肯定する要素ばかりが描っているわけでもなく、やはりこの案についても今後の史料の増加などを待って、十分な検証をしていく必要があるものと考える次第である。

現段階では、東木津遺跡周辺の歴史的様相を解明するだけの史料は決して多いとは言えないが、しかし、これまでに検出された蓋然性を勘案するならば、少なくとも、古代におけるこの遺跡には、公的施設が存在していたことは確実と言えよう。したがって、この遺跡は、高岡市内及び周辺地域の古代史を解明するためには欠くことのできない重要な遺跡であると言え、今後もその具体的な内容にせまるべく、調査を継続していくべきではないかと考える次第である。

東木津遺跡（丹羽地区）

序　　説

調査にいたる経緯

平成11年度中に、地権者の一人である丹羽政文氏より、高岡市佐野889-1 の地に資材置場を建設するにあたり、埋蔵文化財の取り扱いについて照会がなされた。

照会のあった地点は、東木津遺跡の埋蔵文化財包蔵地として周知されていた上、西接する「チックタック地区」では、平成11年度の試掘調査によって当遺跡の中心施設とみられる建物群を検出していったことから、地下には埋蔵文化財の所在する可能性が濃厚であるとみられたため、試掘調査の必要性が生じた。

その後、同氏と高岡市教育委員会文化財課及び富山県教育委員会との間で行われた協議の結果、平成12年5月から、建設予定地の試掘調査を国庫補助にて行う了承を得るに至り、同月10日から屋外での発掘調査がとり行われることとなった。

調査経過

屋外での発掘調査は、平成12年5月10日から同年6月9日まで実施した。この調査区の周辺は、調査に着手する以前から、古代を中心とする遺物が表面採集されていたため、地下には当該期の遺構や遺物の存在することが予想された。

表土の除去は概ねバックフォーで行い、その後、速やかに手作業による遺物包含層の掘削や遺構の確認などを行ったが、調査の途中で握立柱建物として組み立て得る握方を数基検出したため、当初の予定よりも掘削範囲を拡大し、より詳細な遺構の確認を試みることとした。この結果、調査対象面積680 m²に対し、150 m²を調査することとなった。



図4. 東木津遺跡・調査区周辺図（平成10年当時の地図を使用）

グリット

この調査区におけるグリットは、平面直角座標系の第vi座標系（原点は北緯36°，東経137° 10'）に合わせることとし、一辺10m四方を一区画とし、極力メッシュに近い状況になるよう杭を設定した。

東西をX軸、南北をY軸とし、グリットの南西隅の数値がそのグリットを表すものとして、X=1、Y=1の位置は、原点より西へ15.48 km、北へ80.255km向かった位置となる。

なお、このメッシュは、過去に調査された調査区との照合をはかるため、既往のメッシュと同様な方位に設定し、当該調査区にまで展開させることとした。

遺構

今回の調査区からは、遺構とみられる上面プランを幾つか検出した。これらのうち、比較的性格の明瞭なものは、調査区北端で検出された掘立柱建物と、東端に位置する南北方向の溝状遺構である。

この他にも、遺構と見做しうる土層プランそのものは検出されているが、これらは本調査を行うことによって、大幅に内容が変化する可能性があるため、以下では、上記した比較的内容の明瞭な遺構のみの解説を行うこととする。

掘立柱建物 SB01

調査区北端において検出された掘立柱建物である。建物の一部が調査区外へと達するため、今回は8基の掘方を検出したにとどましたが、図5に示したように、平成10年度の検出遺構と照合するならば、北面庇を有する可能性がもたれる。

掘方は一辺80cm程度の規模を有し、比較的大型の部類に属するが、掘削を行っていないため、切り合いの有無や確定な年代をおさえることなどはできなかった。しかし、10年度に検出された建物群と同様な方位を呈することから、8世紀後半代から9世紀代まで存続した可能性が考えられる。

なお、東木津遺跡からは、この建物の例を含めて計3棟の庇を有する建物が検出されたことになる。これらはいずれも当調査区周辺に立地している他、出土遺物についても、周辺からは官衙的なものが集中する傾向にあることから、この地点は、当遺跡における中枢施設の存在する地点だったのではないかと考える次第である。

溝 SD01

調査区の東側を南北方向にはしる溝状遺構である。この遺構は、平成10年度の調査で検出された『人溝』と同一のものである。

今回は試掘調査ということもあり、一部にスリットを入れる程度の掘削にとどめたが、覆上の上面からは、株洲焼などの中世以降の遺物も出土したことから、この遺構を古代のものとするには、更に深く調査の手を広げる必要があるものと思われる。

ちなみに、本年度に調査した「山崎地区」からも、10年度と同様な覆土や木組みを有する溝状遺構が検

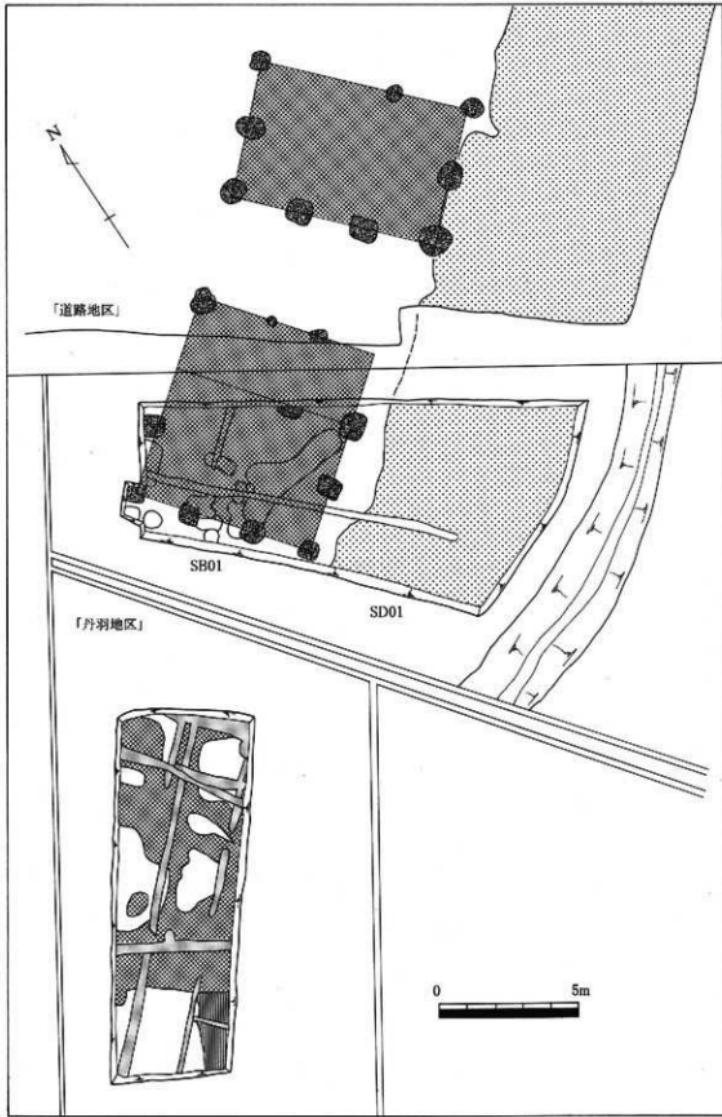


図5. 東木津遺跡 丹羽地区・調査区周辺図

出されているが、ここでは最下層から現代の遺物が出土している。したがって、この遺構の埋没年代については、当初古代に属するものと予想していたが、かなり新しくなるものと再認識された。

出土遺物

今回の調査区からは、試掘調査としては比較的多くの遺物が出土した。遺物は古代から近世にいたる幅広い年代のものが出土しているが、8世紀後半代から9世紀代までのものが全体の出土量の中でも圧倒数を占める傾向にある。

出土量が多いため、出土遺物の全てを本紙面に掲載することは不可能だが、以下では、そのうちの主要となるものを記載していくこととする。

土師器

今回の調査区から検出された土師器については、杯A、杯B、碗、皿などといった食膳具と、壺をはじめとする煮炊具、さらには少數ながらも灯明皿に転用されたものが見受けられた。

これらのはほとんどは後世の磨耗や破損を受けており、このため調整法の識別はおろか接合さえも確ならない状態であったが、確認される範囲では8世紀後半から9世紀代までのものが見受けられた。

なお、表土層からは型式不明の土師質の杯類も出土しているが、これらについては、中世の可能性も考慮される。

須恵器

須恵器については、杯Aや杯Bなどの食膳具、及びこれらに付随する杯B蓋が出土している。その他、壺や大甕といった貯藏具や、転用碗や灯明皿といった文具、そして部分的な検出ではあるが墨書き器なども検出されている。

年代的には8世紀中頃以降から概ね9世紀代までのものが顕著にみられるが、出土量としては杯などの食膳具が全体の中でも圧倒数を占める傾向にあり、現段階での器種構成は、概して官衙的な様相に近い出土傾向であるように見受けられる。

赤彩土器

本調査区からは、確認される範囲で数個体分の赤彩土器が出土している。器種は杯や碗といったものであると思われるが、細片であるため型式や年代などは判然としない。

内面黒色土器

本調査区からは数個体分の内面黒色土器も出土している。後世の破損や磨耗のためか、内面に磨きを残すものがある一方で、これが見受けられないものもある。接合が確ならないため年代については不明な点も多いが、器種は碗や杯といったものが見受けられている。

灯明皿

当調査区からは、5個体ほどの灯明皿が検出されている。使用される器種は、須恵器の杯や土師器の杯又は皿である。5個体の内訳は8世紀代が2個体、9世紀代は3個体である。

なお、東木津遺跡の存続年代は、今後の調査によって更に拡大する可能性があるが、過去の調査成果を鑑みるかぎり、いまのところ古代における中心時期には灯明皿が伴う傾向にあるといえる。

転用硯

当調査区からは、3個体の転用硯が検出された。いずれも頸片であったため、年代は不明であるが、使用される器種は須恵器の杯B蓋と杯Bであることが確認されている。ちなみに、前者は2個体であるのに対し、後者は1個体であった。

なお、官衙的な建物などと同様、硯などの官衙的な遺物についても、当調査区周辺に集中して出土する傾向にあり、やはり周辺には文書活動を伴う官衙的な施設の存在した可能性が考えられる。

墨書き器

当調査区からは、1点だけ墨書き器が検出されている。部分的な検出にとどまるため、詳細は一切不明である。

珠洲焼

今回の調査区からは、細片ながら数十点におよぶ珠洲焼も出土している。いずれも表土層の他、近年まで使用されていた溝などから検出されたものである。器種は壺、甕、すり鉢である。確認される範囲では14世紀代のものが見受けられる。

小 結

以上、平成12年度における、東木津遺跡丹羽地区の試掘調査の概要を記述した。

冒頭でも記したように、今回の調査は開発行為に伴う事前の試掘調査であったため、調査の内容については、調査対象地における地下の埋蔵文化財の確認を行うまでとした。

したがって、検出された遺構についても、その内部を掘削することまではせず、また、過度な掘削となることを避けるため、遺構プランと考えられる土層が確認された時点で基本的に掘削を止めているため、特に本調査のような詳細な成果までは得られていないが、上述もしたように、試掘調査としては比較的多くの検出物を得るに至っている。

まず、検出遺構については、建物跡S B O 1の存在が特記されよう。この建物については、今回の調査区からは身舎部分が検出されたにとどまるが、平成10年度に行われた調査区との遺構配置を照合するに、底をもつ建物であると考えられる。

通常、集落遺跡などでは底を伴う建物の例は少なく、こうしたものは、官衙やこれに準じる建物群の中

板を担う場合が多い。既に周辺の調査区からは計3棟の底のつく建物が検出されたことになるが、いずれも当調査区を中心とする地点に立地することから、この周辺が東木津遺跡における古代の様相の中核であった可能性が考えられる。

なお、当調査区において、明確に建物と認識される遺構はこのSB01のみであるが、この他にも建物の掘方と解することも可能な遺構が検出されており、さらに詳細な調査をすることによって、これらの具體的な姿を把握することもできるのではないかと思われる。

また、今回の調査区からはSD01とした大溝も検出されている。この遺構については、平成10年度の調査によって延長部分が調査され、多量の出土遺物が出土しているが、この中にはこの遺跡の内容を左右する墨書き器や木簡といった文字史料も含まれていたことから、本調査が行われる際には、細心の注意をもってこの遺構の調査にあたる必要があるものと思われる。

一方、出土遺物については、当調査区からは8世紀後半代から9世紀前半代を中心とするものが検出されている。

本書では、比較的残存率の高いものや接合状況の良好なものを実測図として掲載したが、実際に出土しているものを概観するならば、須恵器の出土量は全体の中でも約7割近くを占めている。また、その器種構成についても、杯や碗などといった食膳具が全体の約93%を占めており、この傾向は官衙的な遺跡のそれとも近い。

なお、詳細については、過去の調査や本書に同時掲載した「山崎地区」などの記述に譲るが、この遺跡からは円面鏡や木簡などといった官衙的な遺物も多数検出されており、上記した出土遺物の器種構成とも一致する。

ただし、この遺跡では、9世紀後半代以降の遺物の出土量が、前段階に比べて減少する傾向が見受けられる。また、この時期以降の官衙的な遺跡に特徴的な縁剥陶器や灰釉陶器などといった出土遺物も、現時点では検出されていず、この遺跡をもって長期にわたる官衙的な遺跡とみるにも課題が残るものと思われる。

さて、東木津遺跡における本年度の調査成果については、「山崎地区」のところでも同様なことを述べたが、総じて言うならば、この遺跡の古代の様相については官衙的な内容を考えることができるものの、その全体の内容を把握するには、まだ多くの課題が残されているものと思われる。

ただし、現状では埋蔵文化財包蔵地とされる範囲の一部を調査したにすぎないため、今後も調査を継続することによって、そうした課題についても次第に解消され、ひいては周辺地域における貴重な文化財の保護につながっていくのではないかと思われる。

参考文献

- 高岡市 『たかおか 歴史との出会い』 1991
- 高岡市 『高岡市史 上巻』 1959
- 高岡市教育委員会 『下佐野遺跡調査概報Ⅰ』 1992
- 高岡市教育委員会 『石塚遺跡調査概報Ⅰ』 1987
- 高岡市教育委員会 『石塚遺跡調査概報Ⅱ』 1988
- 高岡市教育委員会 『石塚遺跡調査概報Ⅲ』 1995
- 高岡市教育委員会 『市内遺跡調査概報Ⅰ』 1992
- 高岡市教育委員会 『市内遺跡調査概報Ⅲ』 1993
- 高岡市教育委員会 『市内遺跡調査概報Ⅳ』 1996
- 高岡市教育委員会 『市内遺跡調査概報Ⅴ』 1997
- 高岡市教育委員会 『市内遺跡調査概報Ⅶ』 1998
- 高岡市教育委員会 『市内遺跡調査概報Ⅸ』 1999
- 高岡市教育委員会 『市内遺跡調査概報Ⅹ』 2000
- 高岡市教育委員会 『須田藤の木遺跡調査報告』 2000
- 高岡市教育委員会 『高岡市遺跡地図』 2000
- 富山県教育委員会 『富山県埋蔵文化財包蔵地図』 1993
- 角川日本地名大辞典編纂委員会 『角川日本地名大辞典16 富山』 1979
- 中世土器研究会 『概説 中世の土器・陶磁』 1995
- 荒井隆・岡田一広 『東木津遺跡』『木簡研究』21 木簡学会 1999
- 荒井隆・岡田一広 『東木津遺跡』『木簡研究』22 木簡学会 2000
- 石井則孝 『考古学ライブラリー42 陶硯』 ニューサイエンス社 1985
- 内田重紀子 『富山県の古代施釉陶磁器』『富山考古学研究』紀要第2号 1999
- 宇野隆夫 『律令社会の考古学的研究——北陸を舞台として——』 1991
- 岡本淳一郎・三島道子・町田賢一・上田尚美 『佐野台地における古墳出現期の土器について』『富山考古学研究』紀要第2号 1999
- 金田章裕 『古代莊園と景観』東京大学出版会 1998
- 金田章裕 『古地図からみた古代日本——土地制度と景観——』中公新書 1999
- 鈴木景二 『越中の古代莊園研究の動向』『富山史壇』129 越中史壇会 1999
- 田島明人 『土師器よりみた古墳時代土器群の変遷』『漆町遺跡Ⅰ』 1986
- 藤井一二 『古代日本の四季ごよみ——旧暦にみる生活カレンダー——』中公新書 1997
- 藤井一二 『東大寺開園の研究』塙書房 1997
- 山中敏史 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房 1996
- 吉岡康暢 『日本海域の土器・陶磁 古代編』六興出版 1989
- 吉岡康暢 『日本海域の土器・陶磁 中世編』六興出版 1990
- 米沢康 『北陸古代の政治と社会』法政大学出版会 1989

出来田南遺跡（黒川仏壇店地区）

出来田南遺跡黒川仏壇店地区

遺跡概要

「出来田南遺跡」は、市東部に位置し、庄川左岸にあたる。これは、平成2年度の分布調査事業により新規台帳変更されたものである。また、調査地区周辺には、平成11年度の試掘調査において樹立柱建物などが確認された出来田南遺跡大和ハウス地区などがみられる。また、近年の研究成果では、鳴戸庄を地久子川（包蔵地の北西側を流れる。）流域に比定する考えが示すされており、これにあたる可能性がある。

基本層序

耕作土、（遺構面）黄褐色砂質土

調査概要

所在地：高岡市出来田141-1、対象面積：986m²、調査面積：302m²

調査期間：平成12年5月19日～同年11月30日、調査原因：事務所兼倉庫の建設

原因者：㈲丸栄黒川仏壇店 代表取締役 黒川義則

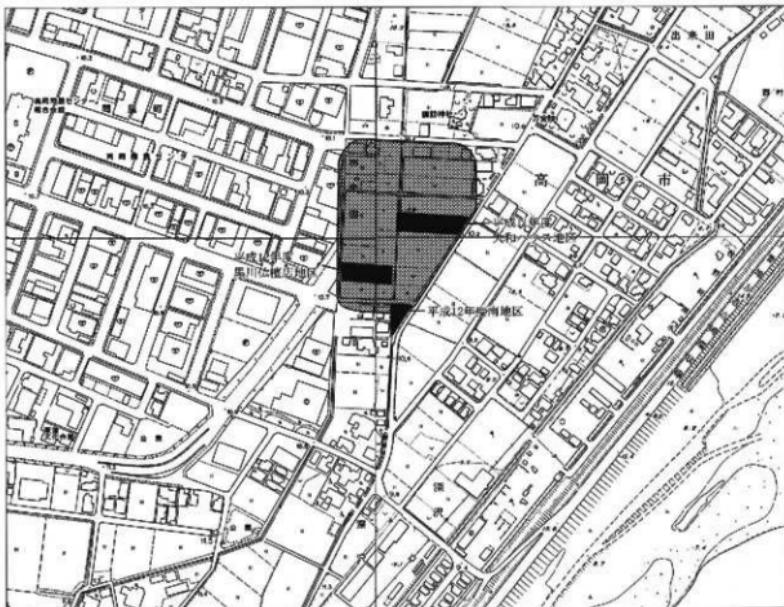


図6. 出来田南遺跡黒川仏壇店地区 遺跡周辺図 (1/5000)

調査結果

遺構は、掘立柱建物1棟、溝などが検出された。また、遺物は須恵器・土師器・墨書き器・赤彩土器・転用鏡・珠洲・羽口・鉄滓などが出土した。墨書き器は、「酒麻呂」や「辺」(旁が欠損している)がみられる。須恵器は、杯A・杯B・杯蓋・壺・甕・稲輪などが確認されている。土師器は、杯A・壺・鍋などがみられる。その他、赤彩内黒土器もみうけられる。また、遺構などとの関連性は不明であるが、遺構精査作業において、調査坑全体から木炭が顕著に検出された。なお、調査後の指標に関しては協議中である。遺構図の作成にあたっては、ラジオコントロール・ヘリコプターにより撮影、簡易図化作業を実施した。また、図化に際し調査区域の東端及び西端に南北方向にはするコンクリート擁壁などに釘をうちこみ基準とした。本報告において提示した図面類は、公共座標における北にあわせたものである(大和ハウス地区の図面は、公共座標を意識したものでない、精度面で限界はあるが参考のため掲載した)。本調査区域西部は、都市計画道路能町庄川線の計画線上に位置することから、将来的に調査が必要になってくるものと考えられる。

参考文献

高岡市教育委員会2000『市内遺跡調査概報X—平成11年度、出来田南遺跡の調査他—』

高岡市教育委員会2000『高岡市遺跡地図』

金田章裕1999『古地図からみた古代日本 土地制度と景観』中央公論新社



図7. 酒麻呂



図8. 辺

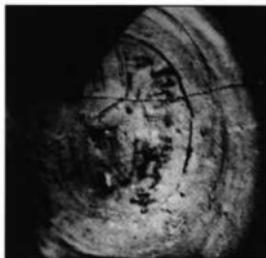


図9. 酒麻呂
(赤外線投影写真)

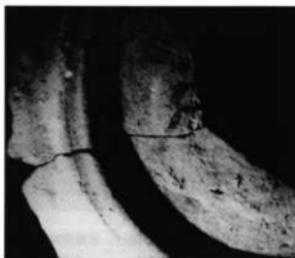


図10. 辺
(赤外線投影写真)

赤外線写真是、県埋蔵文化財センターの御好意で撮影させていただいた。
赤外ビジョンカメラ (C-2741-03, 800~1800nm, 浜松ホトニクス製)



図11. 米軍空中写真 (M644-88) 1947年11月13日撮影
出来田南遭跡周辺 (約1/25,000)



図12. 出来田南遺跡周辺 遺跡地図（古代）

高岡 1/25,000地形図, NJ-53-5-16-4 国土地理院発行

- | | | |
|------------------|----------------------|--------------------|
| 1 出来田南遺跡 (奈良～中世) | 2 高岡間屋センター遺跡 (飛鳥～平安) | 3 赤祖父羽座間遺跡 (古墳～中世) |
| 4 井日本江遺跡 (奈良～中世) | 5 蓬花寺遺跡 (平安～中世) | 6 HS-02遺跡 (弥生・ |
| 7 上墨田遺跡 (奈良～中世) | 8 西二塚東藤平藏遺跡 (古墳～中世) | 古墳・古代・近世) |

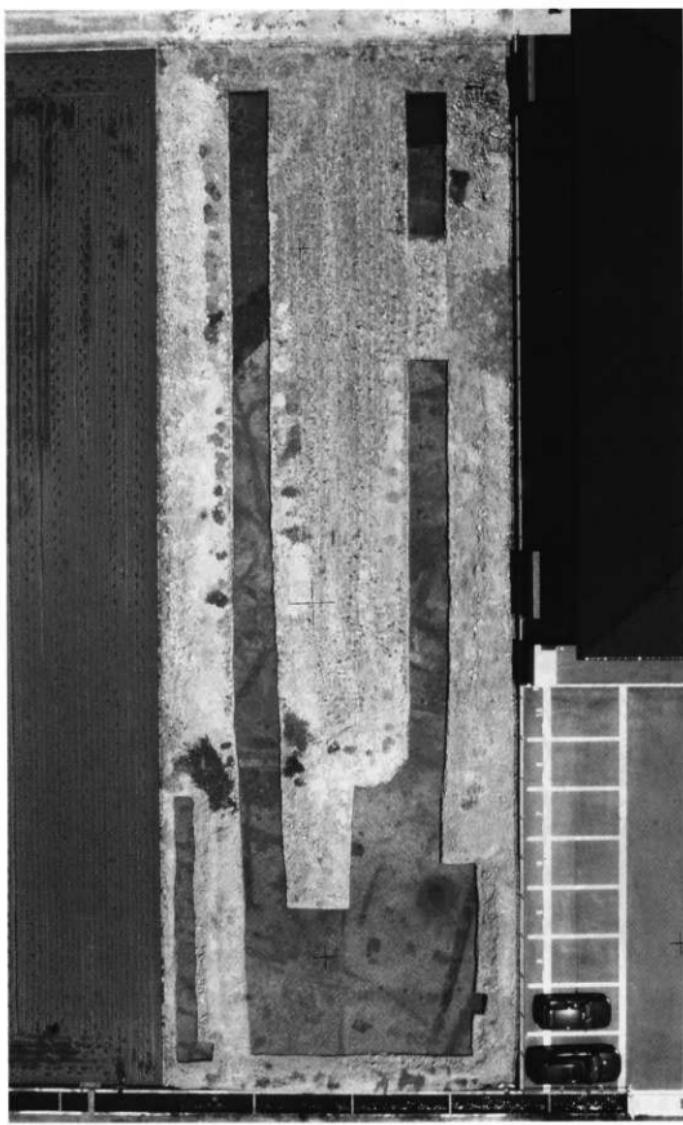


图13. 出来田南遗址 黑川神社地区 掘出状況垂直全景写真

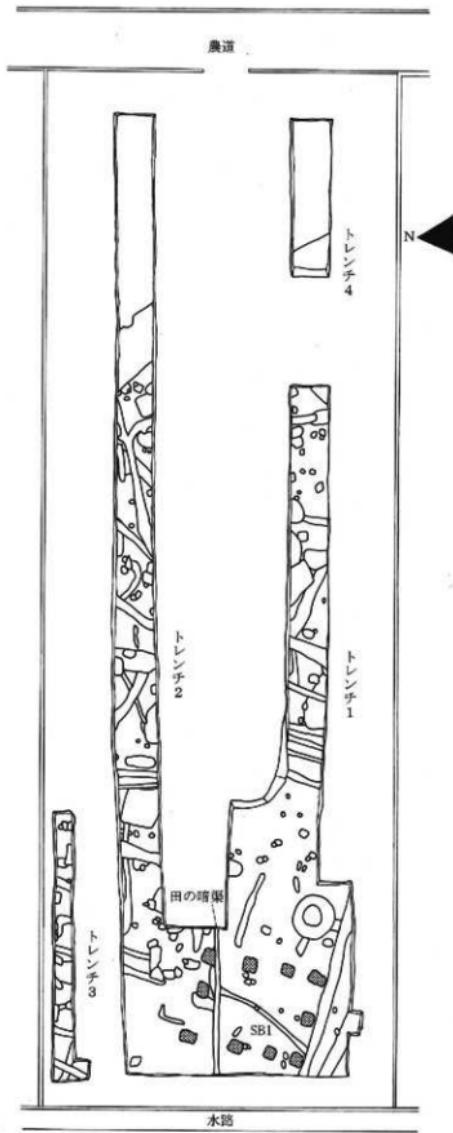


図14. 出来田南遺跡 黒川仏櫻店地区 違構図 (1/250)

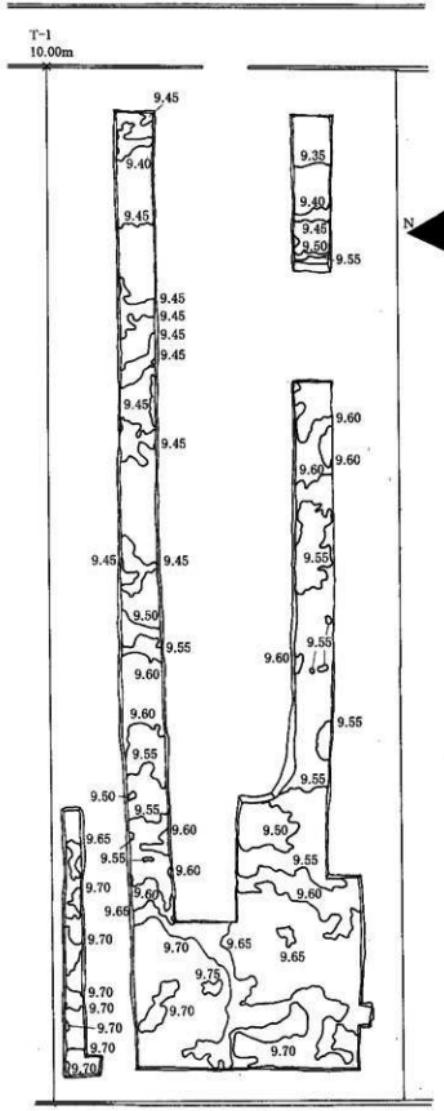


図15. 出来田南遺跡 黒川仏櫻店地区 等高線図 (1/250)
(簡易図化により 5 cm コンタで表現した。基準は T-1 (10.00m) からの相対的な高さで表現。)

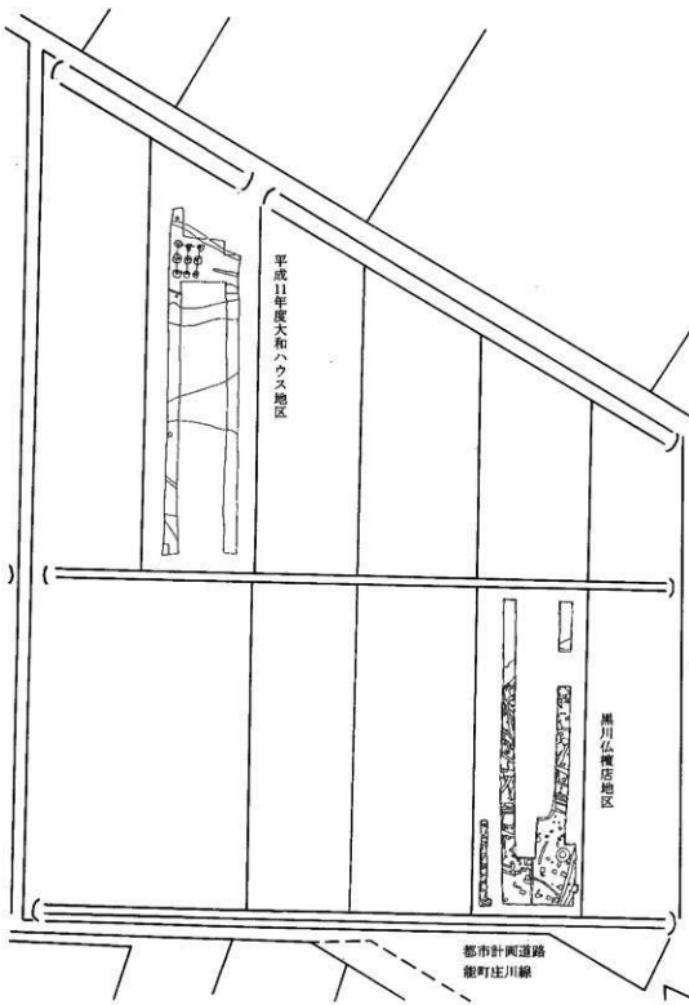


図16. 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区及び大和ハウス地区 (1/800)

その他の試掘調査

I 東木津遺跡 西本地区

遺跡概観

当調査区は、東木津遺跡の範囲の中でも西辺に位置する。調査件数が少ないため、近傍については不明だが、約200mほど東に位置する「チックタック地区」などからは、官衙的な様相が確認されている。

基本層序

現在の田面から約10~15cmほど耕作土を掘削したところで地山が検出された。包含層等は後世の削平により消失している。

調査概要

所在地：高岡市佐野859-1， 対象面積：426 m²， 発掘面積：43m²

調査期間：平成12年4月24日～4月25日， 調査原因：駐車場建設， 原因者：西木茂

調査結果

特に遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。



図17. 東木津遺跡西本地区 遺跡周辺図 (1/3000)

II 東木津遺跡 諸橋地区

遺跡概観

当調査区は東木津遺跡の中でも北辺に位置しており、後述の「曾田地区」の近隣にあたる。

基本層序

現在の田面から約10~20cmほど耕作土を掘削したところで地山が検出された。

調査概要

所在地：高岡市木津1108-2, 対象面積：105 m², 発掘面積：19m²

調査期間：平成12年6月30日～7月3日, 調査原因：駐車場増設, 原因者：諸橋智津子

調査結果

調査区の南北両端から遺構らしきプランを検出した。そのうち南側については、覆土の様子などから新しい印象ももたれたが、一方の北側については、覆土も黒褐色を呈していた他、数10cmほど掘削を試みたにもかかわらず、遺構底部を検出するには至らなかったため、大型の遺構となる可能性が考えられる。

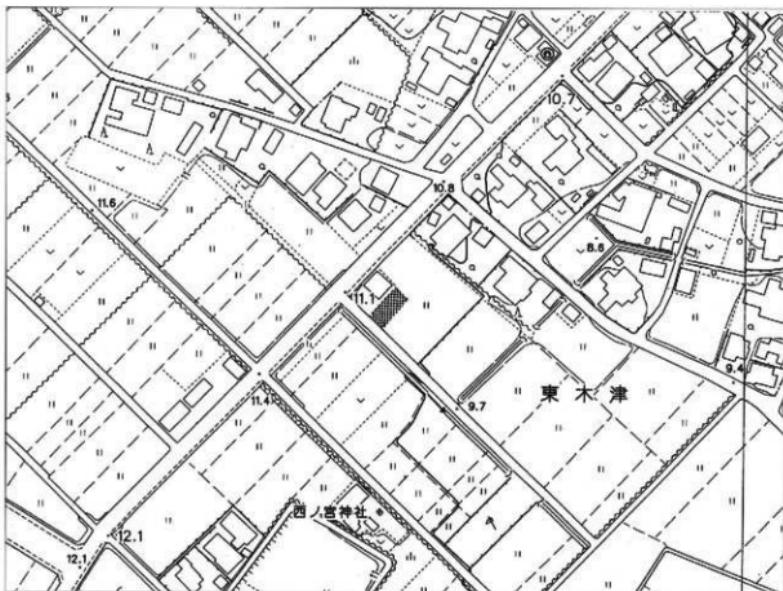


図18. 東木津遺跡諸橋地区 遺跡周辺図 (1/3000)

III 東木津遺跡 曾田地区

遺跡概要

当調査区は、東木津遺跡の中でも比較的北辺に位置している。周辺には、平成10年度に調査され、木橋をはじめとする多くの木製品を検出した「堀井地区」などが所在している。

基本層序

現在の田面よりも約10~15cmの深さで地山が検出された。地山の直上から田面までは、既に耕作による擾乱を受けており、特に包含層等は残存していなかった。

調査概要

所在地：高岡市木津991-1， 対象面積：750 m²， 発掘面積：95 m²

調査期間：平成12年8月7日～8月8日， 調査原因：資材置場建設， 原因者：曾田民男

調査結果

特に遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

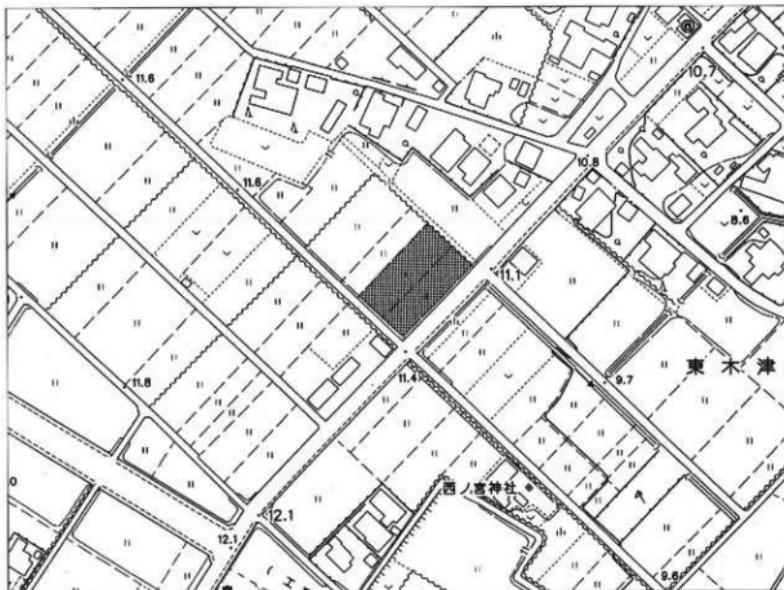


図19. 東木津遺跡曾田地区 遺跡周辺図 (1/3000)

IV 中曾根西遺跡 稲垣地区

遺跡概要

「中曾根西遺跡」は、市北東部に位置し、庄川右岸にある。調査地区周辺には、横館塚遺跡・上牧野田島遺跡・上牧野宮袋遺跡などがみられるが、未調査であり詳細は不明である。また、平成11年度に実施した敷野中学校に隣接する牧野地区高齢福祉施設の建設に先立つ試掘調査においても、遺構などは検出されていない。

基本層序

耕作土、灰色粘質土

調査概要

所在地：高岡市中曾根552-1、対象面積：500m²、調査面積：60m²

調査期間：平成12年4月17日、調査原因：個人住宅の建設、原因者：稻垣弘基

調査結果

遺構は、検出されなかった。また、遺物は越中瀬戸・不明施釉陶器であるが、遺構に伴うものではない。

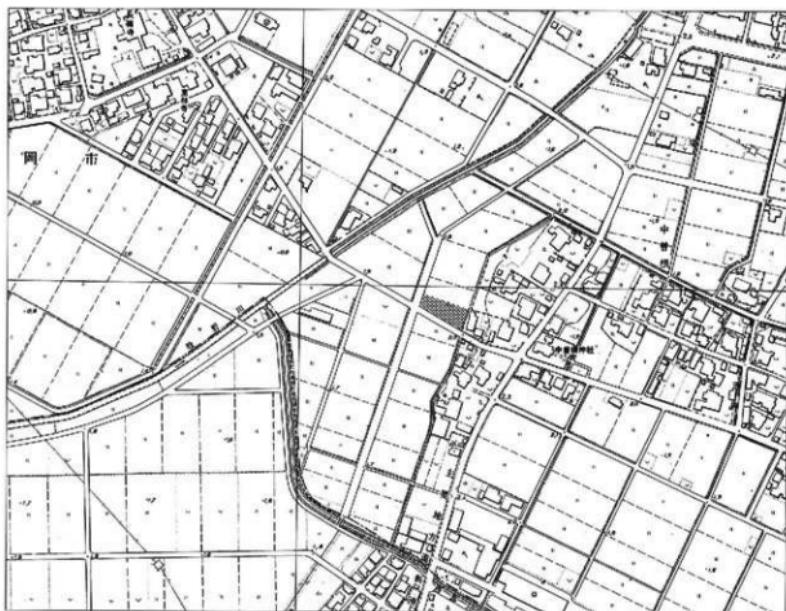


図20. 中曾根西遺跡稲垣地区 遺跡周辺図 (1/5000)

V 五十里西遺跡 谷口地区

遺跡概観

「五十里西遺跡」は、市西部に位置し、小矢部川左岸にあたる。調査地区周辺には、平成11年度の調査において掘立柱建物や太刀の足金具などが確認された須田藤の木遺跡などがみられる。また、近年の研究成果では、射水郡須加庄を須田藤の木遺跡に比定する考えが呈示されている。

基本層序

盛土、黒色砂質土

調査概要

所在地：高岡市五十里4912-1、対象面積：285m²、調査面積：30m²

調査期間：平成12年4月20日、調査原因：資材置場の造成、原因者：谷口武夫

調査結果

当該地は、調査着工以前から盛土されていた。また、遺構及び遺物は、検出されなかった。

参考文献

高岡市教育委員会1988『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報V』

高岡市教育委員会2000『須田藤の木遺跡調査報告—平成11年度 主要地方道小矢部伏木港線の道路建設工事に伴う調査—』高岡市埋蔵文化財調査報告第4冊

金田章裕1999『古地図からみた古代日本 土地制度と景観』中央公論新社

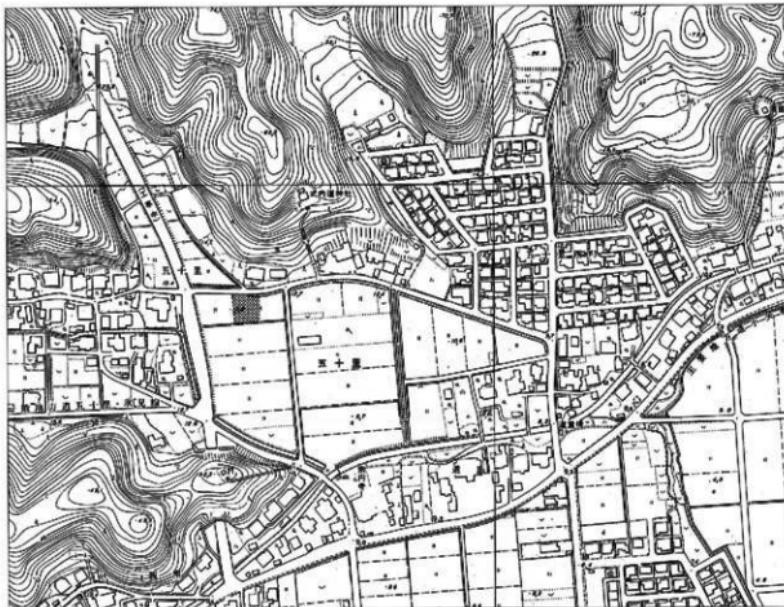


図21. 五十里西遺跡谷口地区 遺跡周辺図 (1/5000)

VI 蔵野町遺跡 武田工務店地区

遺跡概要

「藏野町遺跡」は、市南西部に位置し、小矢部川右岸にあたる。調査履歴は、平成2年度資材置場建設に先立つ試掘調査を実施したが、遺構及び遺物は確認されていない。また、調査地区周辺には、辻南遺跡・荒見崎北遺跡・荒見崎村内遺跡などがみられる。

基本層序

耕作土、黄色砂質土、青灰色粘質土

調査概要

所在地：高岡市藏野町271-2、対象面積：74.9m²、調査面積：30m²

調査期間：平成12年4月24日、調査原因：資材置場の造成

原因者：㈲武田工務店 代表取締役 武田庄保

調査結果

遺構及び遺物は、検出されなかった。



図22. 蔵野町遺跡武田工務店地区 遺跡周辺図 (1/5000)

VII 上二上遺跡 上二上公民館地区・森地区

遺跡概観

「上二上遺跡」は、市西部に位置し、小矢部川左岸にあたる。調査地区周辺には、二上横穴墓群・二上古墳群などがみられるが、未調査であり詳細は不明である。また、当該地は木造平屋建の公民館が既設されており、同規模での改築であることが地元自治会長から提出の図面により明白であったことから、慎重工事により対応した。

基本層序

森地区

盛土、耕作土、黒色粘質土、灰色粘質土

調査概要

上二上公民館地区

所在地：高岡市二上町1110-2, 対象面積：653m², 調査面積：653m²

調査期間：平成12年4月26日～同年9月30日, 調査原因：自治公民館の建設, 原因者：上二上自治会長

細野藤樹

森地区

所在地：高岡市二上町718, 対象面積：290m², 調査面積：30m²

調査期間：平成12年10月5日, 調査原因：個人住宅の建設, 原因者：森美智子

調査結果

上二上公民館地区

遺構及び遺物は検出されなかった。

森地区

遺構は、検出されなかった。また、遺物は土師器・珠洲が出土したが、遺構に伴うものではない。

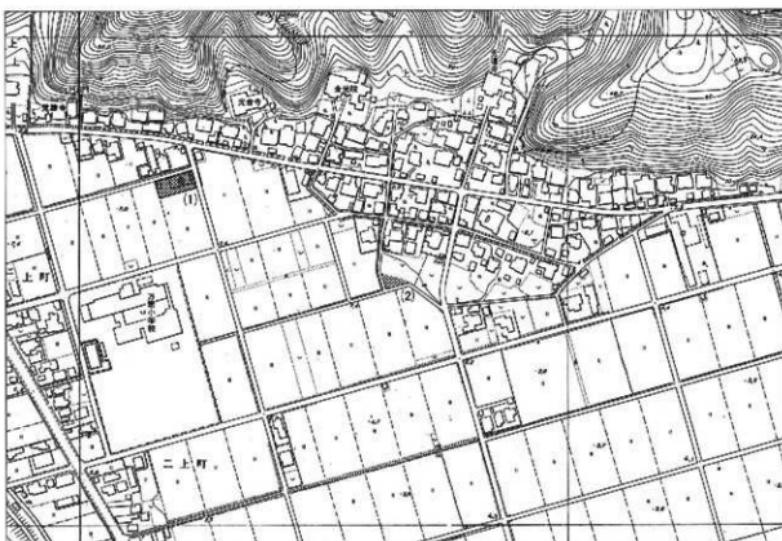


図23. 上二上遺跡 上二上公民館地区(1)・森地区(2) 遺跡周辺図 (1/5000)

VII 越中国府関連遺跡 山地区

遺跡概観

「越中国府関連遺跡」は、市北部の伏木台地一帯に所在する。調査地区周辺には、県指定史跡である越中国分寺跡並びに越中一宮氣多神社などがみられる。また、当該地は国分寺の寺域推定地北西隅に該当するものと考えられるが、これまでの調査では明確な遺構は確認されていない。

基本層序

耕作土、青灰色粘質土

調査概要

所在地：高岡市伏木古府2丁目4番8号、対象面積：35.6m²、調査面積：4.0m²

調査期間：平成12年5月17日、調査原因：個人住宅の建設、原因者：山主次郎

調査結果

遺構は、検出されなかった。遺物は、瓦器が出土している。

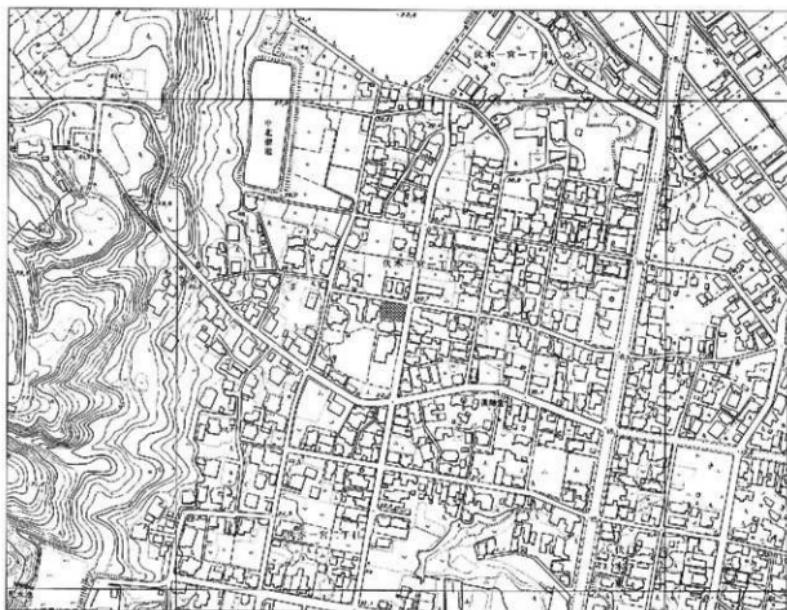


図24. 越中国府関連遺跡山地区 遺跡周辺図 (1/5000)

IX 出来田南遺跡 南地区

遺跡概要

「出来田南遺跡」は、市東部に位置し、庄川左岸あたる。調査地区周辺には、平成11年度の試掘調査において掘立柱建物などが確認された出来田南遺跡大和ハウス地区及び平成12年度に試掘調査を実施した出来田南遺跡黒川仏壇店地区などがみられる。また、遺跡周辺には、井口本江遺跡・高岡問屋センター遺跡・赤祖父角田遺跡・赤祖父羽座間遺跡が所在し、遺跡群を形成する可能性がある。なお、HS-O-2遺跡については、平成11年度に台帳変更（範囲縮小）をおこなった。また、近年の研究成果では、射水郡鳴戸庄を地久子川流域に比定する考えが示されており、これにあたる可能性がある。

基本層序

盛土、黄褐色砂質土、青灰色粘質土

調査概要

所在地：高岡市出来田130-1、対象面積：224m²、調査面積：15m²

調査期間：平成12年5月17日、調査原因：共同住宅の建設、原因者：南興三次

調査結果

遺構及び遺物は検出されなかった。



図25. 出来田南遺跡南地区 遺跡周辺図 (1/5000)

X 越中国府関連遺跡 堀地区

遺跡概観

「越中国府関連遺跡」は、市北部の伏木台地一帯に所在する。調査地区周辺には、白山経塚などがみられる。また、周辺では高岡市立古府公民館建設予定地において、事前の試掘調査を実施したが、明確な遺構は確認されなかった。

基本層序

耕作土、黄色粘質土（小礫を含む）

調査概要

所在地：高岡市伏木一宮 3 丁目373、対象面積：2 7 2 m²、調査面積：3 0 m²

調査期間：平成12年6月13日、調査原因：個人住宅の建設、原因者：堀義孝

調査結果

遺構は、検出されなかった。また、遺物は須恵器が表土から出土したにとどまる。

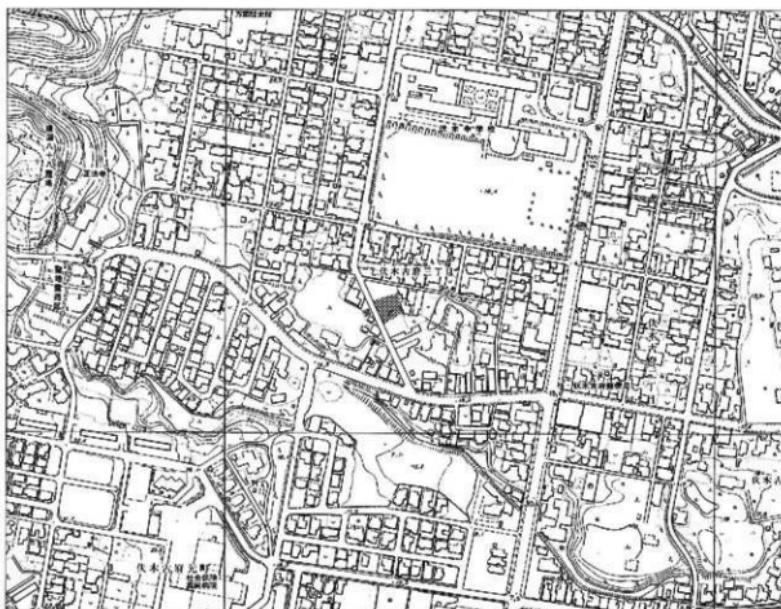


図26. 越中国府関連遺跡堀地区 遺跡周辺図 (1/5000)

XI 越中国府関連遺跡 寺嶋地区

遺跡概観

「越中国府関連遺跡」は、市北部の伏木台地一帯に所在する。調査地区周辺には、県指定史跡である越中国分寺跡並びに越中一宮氣多神社などがみられる。また、当該地は国分寺の寺域推定地南西隅にあたる面のと考えられるが、これまでの調査において明確な遺構は確認されていない。

基本層序

耕作土、赤褐色粘質土

調査概要

所在地：高岡市伏木一宮 1 丁目212-1、対象面積：438m²、調査面積：15m²

調査期間：平成12年6月13日、調査原因：個人住宅の建設、原因者：寺嶋哲夫・寺嶋実

調査結果

遺構及び遺物は、検出されなかった。なお、調査区域東部に設定した調査坑では、若干地山が深くなる傾向を示すことから、国分寺推定地西部を南北方向にはしる谷地形の西端にあたる可能性がある。



図27. 越中国府関連遺跡寺嶋地区 遺跡周辺図 (1/5000)

XII 鷺北新遺跡 サンバリー高岡病院地区

遺跡概観

「鷺北新遺跡」は、市北東部、標高約5mの微高地上に位置する。これは、平成6年度に実施した分布調査事業により、包蔵地（散布地）として新現台帳変更したものである。また、調査履歴は平成8年度に実施した高岡市能町駅南土地区画整理事業に先立つ、試掘及び本調査が挙げられる。この際には、弥生時代後期末（月影～白江式）及び中世（南北朝～室町時代）を主体とした遺構及び遺物が確認されている。現在では、2000年に刊行された『高岡市遺跡地図』において集落として位置づけられている。

基本層序

山砂及び碎石（駐車場増設時の盛土）、耕作土、黄褐色粘質土

調査概要

所在地：高岡市鷺北新196-1、対象面積：2, 279 m²、調査面積：15 m²

調査期間：平成12年6月29日、調査原因：老人保健施設駐車場の増設

原因者：サンバリー高岡病院 理事長 栗林実世治

調査結果

当該地は、駐車場の暫定供与がなされていたため、既に盛土されていた。遺構は、駐車場造設直前の田面などに対応する暗渠排水が確認でき、他の溝及び土坑にみられる埋土は暗渠と同一の色調であったため、時期はこれを遡らないものとし、遺構とは判断しなかった。また、遺物は、検出されなかった。

参考文献

高岡市教育委員会1995高岡市埋蔵文化財分布調査概報VI—平成6年度、牧野・能町地区の遺跡分布調査—

高岡市教育委員会1998市内遺跡調査概報VI—平成7年度赤祖父羽座間遺跡、平成8年度鷺北新遺跡の調査—

高岡市教育委員会2000高岡市遺跡地図

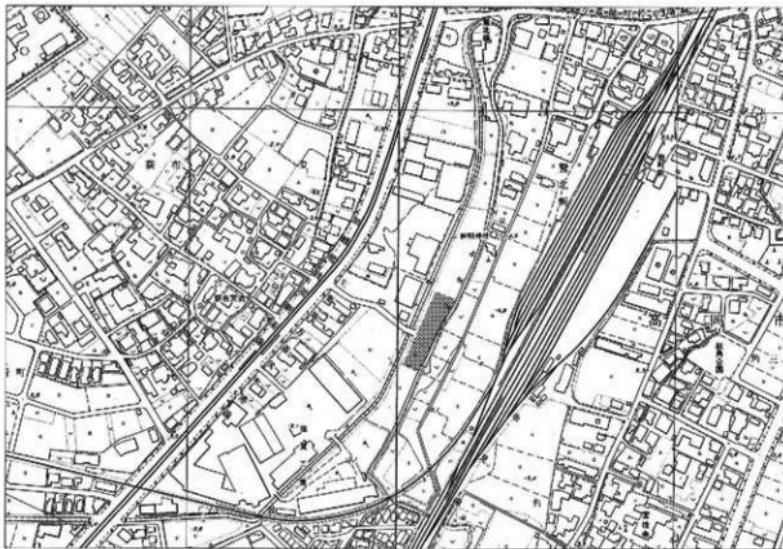


図28. 鷺北新遺跡サンバリー高岡病院地区 遺跡周辺図 (1/5000)

XIII 岩坪岡田島遺跡 三芝硝材地区

遺跡概要

「岩坪岡田島遺跡」は、市西部に位置する。当包蔵地は、平成8年度に県埋蔵文化財センターが実施した分布調査により、NE J-11（散布地）として確認されたもので、その後、（財）県埋蔵文化財調査事務所により実施された、能越自動車道建設に先立つ試掘調査の結果から名称変更されたものである。また、調査地区周辺には、頭川城ヶ平横穴墓群などがみられる。なお、当該地は米軍撮影航空写真などを検討した結果から、圃場整備時にかなりの地形改変を受けていると考えられる。

基本層序

耕作土、灰白色粘質土

調査概要

所在地：高岡市国吉1913、対象面積：1,924m²、調査面積：60m²

調査期間：平成12年9月19日、調査原因：簡易舗装駐車場の建設

原因者：三芝硝材株式会社 代表取締役 木本公洋

調査結果

遺構は、検出されなかった。なお、調査区中央部からは埋没谷が確認されたが、1946年米軍撮影写真から圃場整備直前まで存在した流路などであることがわかる。また、遺物は土師器・珠洲が出土したが、遺構などに伴うものではない。

参考文献

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1999『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地報告—NE J-10・NE J-11—』



図29. 岩坪岡田島遺跡三芝硝材地区 遺跡周辺図 (1/5000)

XIV 戸出光明寺東遺跡 石倉地区

遺跡概要

「戸出光明寺東遺跡」は、市南部に位置し、庄川扇状地の先端部にあたる。また、調査地区周辺には、平成11年度の調査において堅穴住居や掘立柱建物などが確認された戸出古戸出遺跡などがみられる。近年の研究成果では、砺波郡忤名蛭村を遺跡北側（戸出市野瀬周辺）に比定する考えが示されている。

基本層序

耕作土、黄褐色砂質土、灰褐色砂質土、黄色砂質土

調査概要

所在地：高岡市戸出光明寺382、対象面積：500m²、調査面積：30m²

調査期間：平成12年9月22日、調査原因：個人店舗の建設、原因者：石倉儀子

調査結果

遺構は、検出されなかった。なお、試掘坑西端において確認された溝は、土壤の堆積環境から圃場整備直前のものと考えられる。また、遺物は遺構精査時において土師器が出土しが、遺構に伴うものではない。

参考文献

高岡市教育委員会1998『高岡市埋蔵文化財分布調査概報IX—平成9年度、戸出地区東部の遺跡分布調査一』

高岡市教育委員会1999『市内遺跡調査概報IX—平成10年度、下佐野遺跡の調査他一』

高岡市教育委員会2000『戸出古戸出遺跡調査概報—平成11年度、県営土地改良総合整備事業（高岡地区是戸28号線）にかかる農道拡幅改良工事に伴う発掘調査一』

金田章裕1999『古地図からみた古代日本 土地制度と景観』中央公論新社



図30. 戸出光明寺東遺跡 石倉地区 遺跡周辺図 (1/5000)

XV 中曾根北遺跡 野村地区

遺跡概観

「中曾根北遺跡」は、市北東部に位置し、庄川右岸にあたる。当包蔵地は、光明寺敷在地遺跡地及び萬師田木器出土地を併合したものである（井戸址B遺跡も含む）。また、調査地区周辺には、中曾根遺跡・中曾根館遺跡・牧野金屋遺跡などがみられる。また、調査履歴は平成10年度チューリップ調剤地区がみられるが、遺構及び遺物は検出されていない。

基本層序

耕作土、青灰色粘質土

調査概要

所在地：高岡市中曾根112-1、対象面積：291m²、調査面積：15m²

調査期間：平成12年10月4日、調査原因：個人住宅の建設、原因者：野村勇・野村重則

調査結果

遺構は、検出されなかった。また、遺物は土師器であるが、遺構に伴うものではない。

参考文献

高岡市教育委員会1995高岡市埋蔵文化財分布調査概報VI—平成6年度、牧野・能町地区的遺跡分布調査—
高岡市教育委員会1999市内遺跡調査概報IX—平成10年度、下佐野遺跡の調査他—

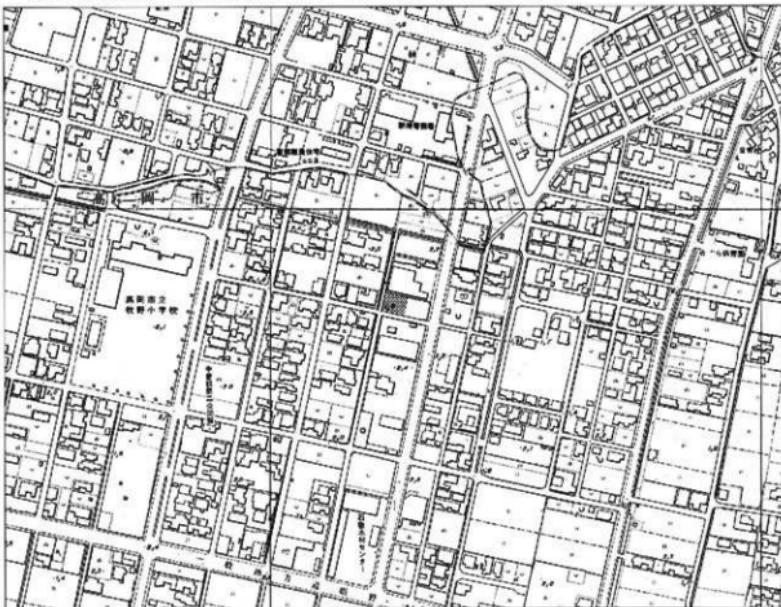


図31. 中曾根北遺跡野村地区 遺跡周辺図 (1/5000)

XII 越中国府関連遺跡 林地区

遺跡概観

「越中国府関連遺跡」は、市北部の伏木台地一帯に所在する。調査地区周辺には、県指定史跡である越中国分寺跡並びに越中一宮氣多神社などがみられる。また、周辺で高岡市教育委員会が実施した試掘調査では明確な遺構は確認されていない。

基本層序

耕作土、赤褐色砂質土（小砾を含む）

調査概要

所在地：高岡市伏木矢田一宮 2 丁目332番地、対象面積：390 m²、調査面積：9 m²

調査期間：平成12年10月4日、調査原因：個人住宅の建設、原因者：林 繁和

調査結果

遺構及び遺物は、検出されなかった。

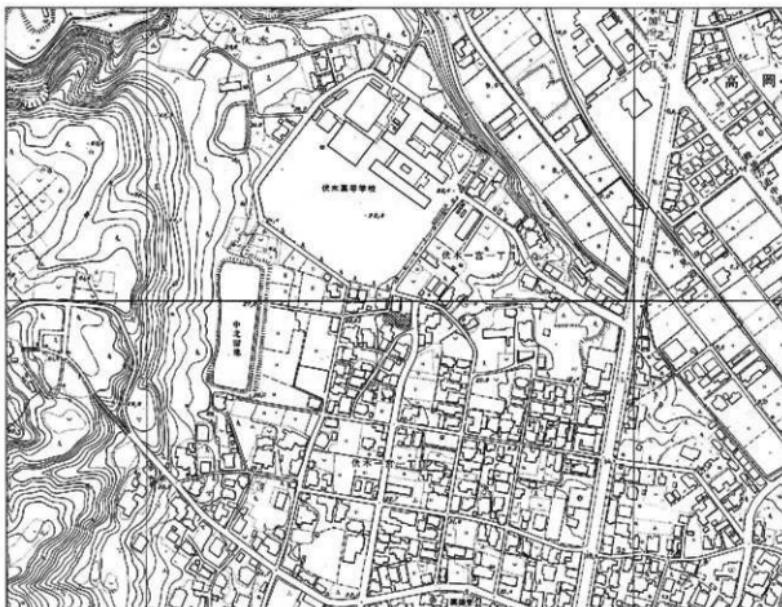


図32. 越中国府関連遺跡林地区 遺跡周辺図 (1/5000)

XII 麻生谷遺跡 前野地区

遺跡概観

「麻生谷遺跡」は、市南西部に位置し、小矢部川左岸にあたる。調査地区周辺には、麻生谷新生園遺跡及び柴野遺跡などが隣接してみられ、遺跡群を形成している可能性がある。また、当調査区は、平成4年度に実施した「市道柴野石堤線」道路工事の事前試掘調査地区に隣接する箇所である。なお、市道柴野石堤線地区では、須恵器・土師器・珠洲などが検出されたが、全体的に深く谷部の存在を示唆しており、遺構は確認されていない。

基本層序

耕作土、灰褐色粘質土、暗灰色粘質土、灰色粘質土、暗灰色粘質土、灰褐色粘質土

調査概要

所在地：高岡市麻生谷386-1、対象面積：499m²、調査面積：50m²

調査期間：平成12年10月5日、調査原因：個人住宅の建設、原因者：前野正博

調査結果

遺構及び遺物は検出されず、市道柴野石堤線地区と同様の堆積状況を示すものと考える。

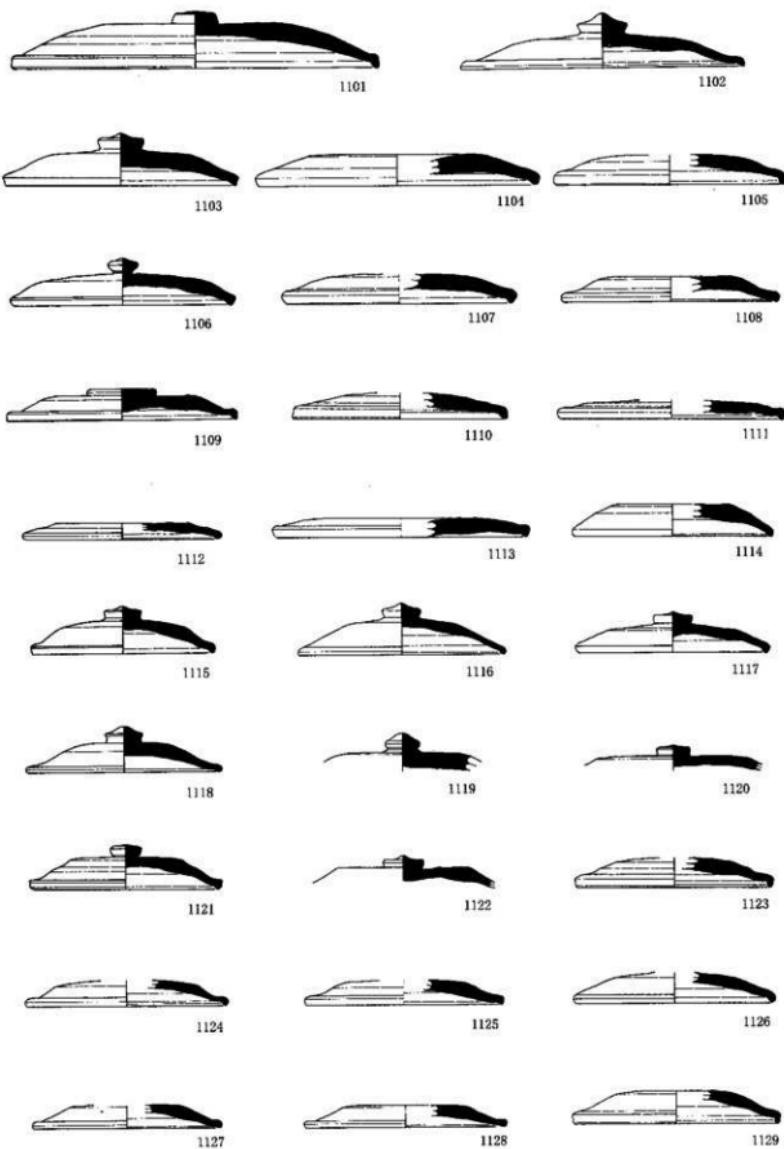
参考文献

高岡市教育委員会1997麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡調査報告—平成4～7年度、主要地方道小矢部伏木港線道路改良工事に伴う調査—

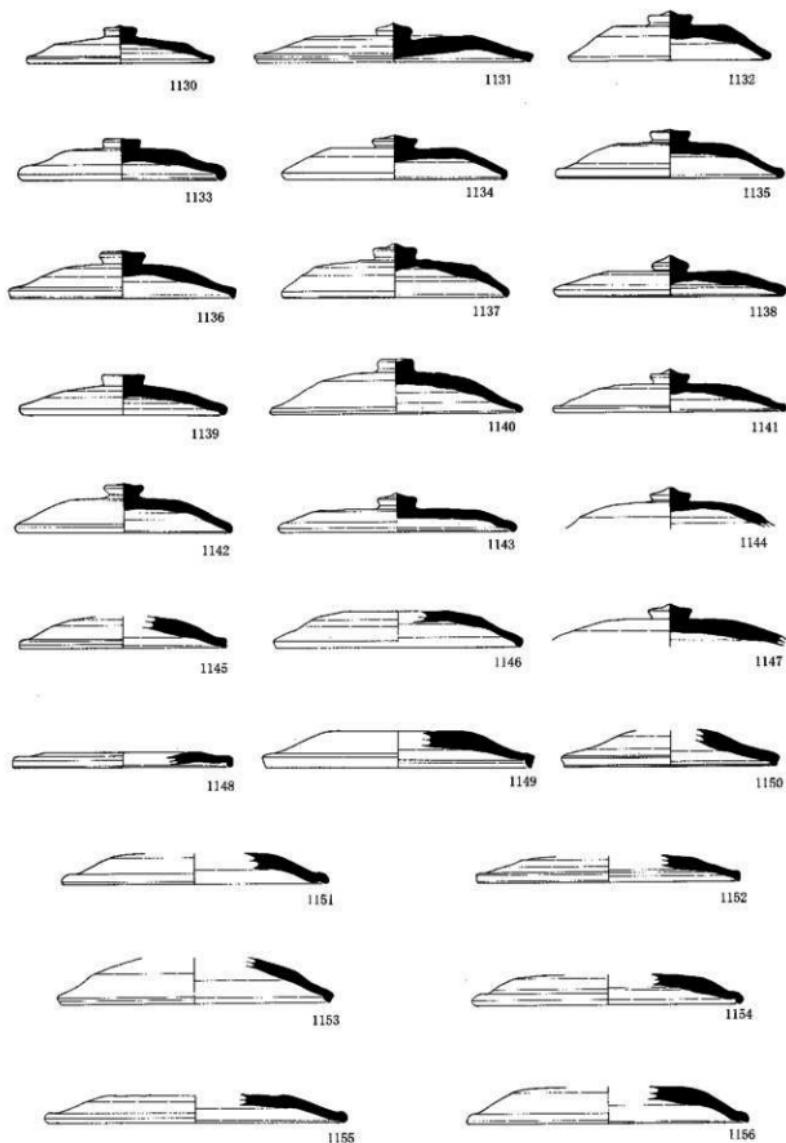


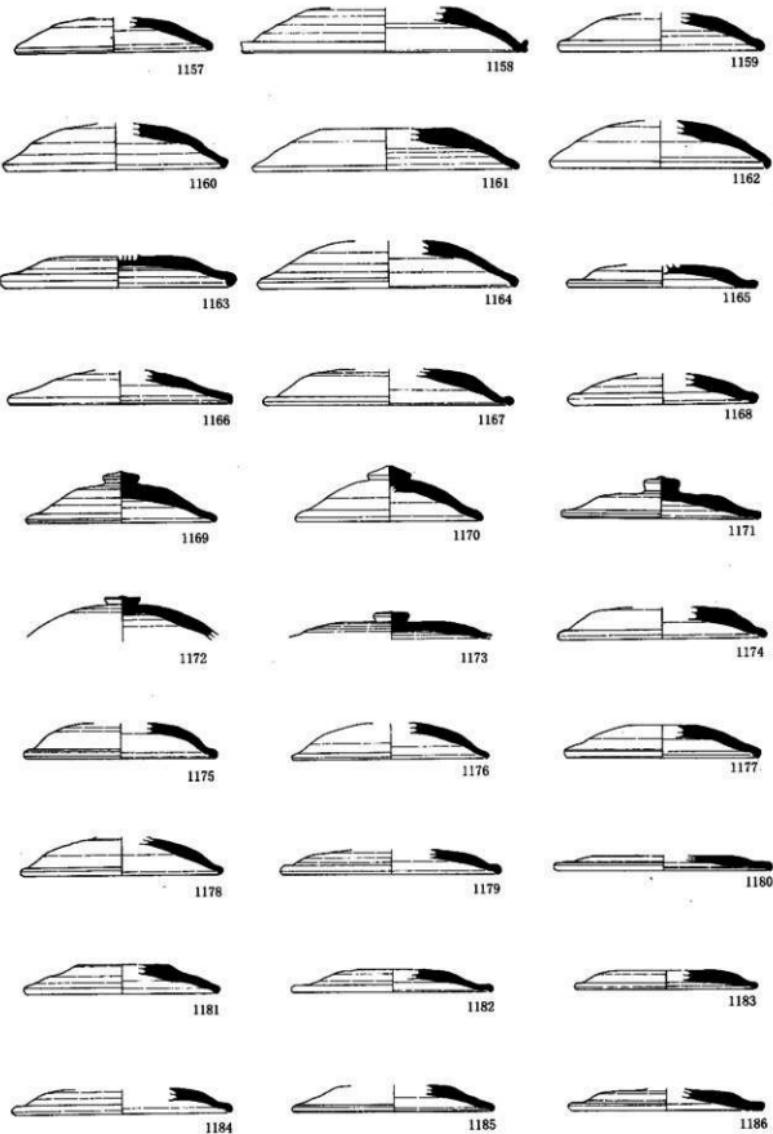
図33. 麻生谷遺跡前野地区 遺跡周辺図 (1/5000)

図面・図版



図面一〇二 遺物実測図 東木津遺跡 山崎地区

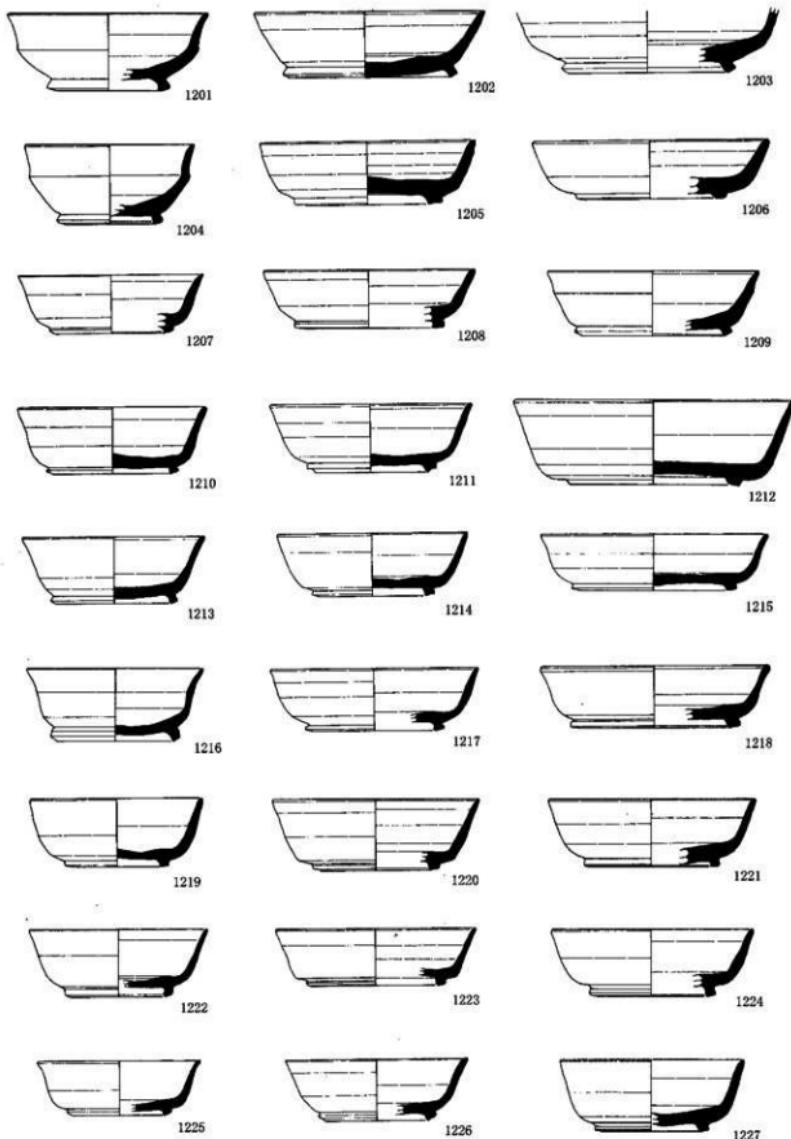




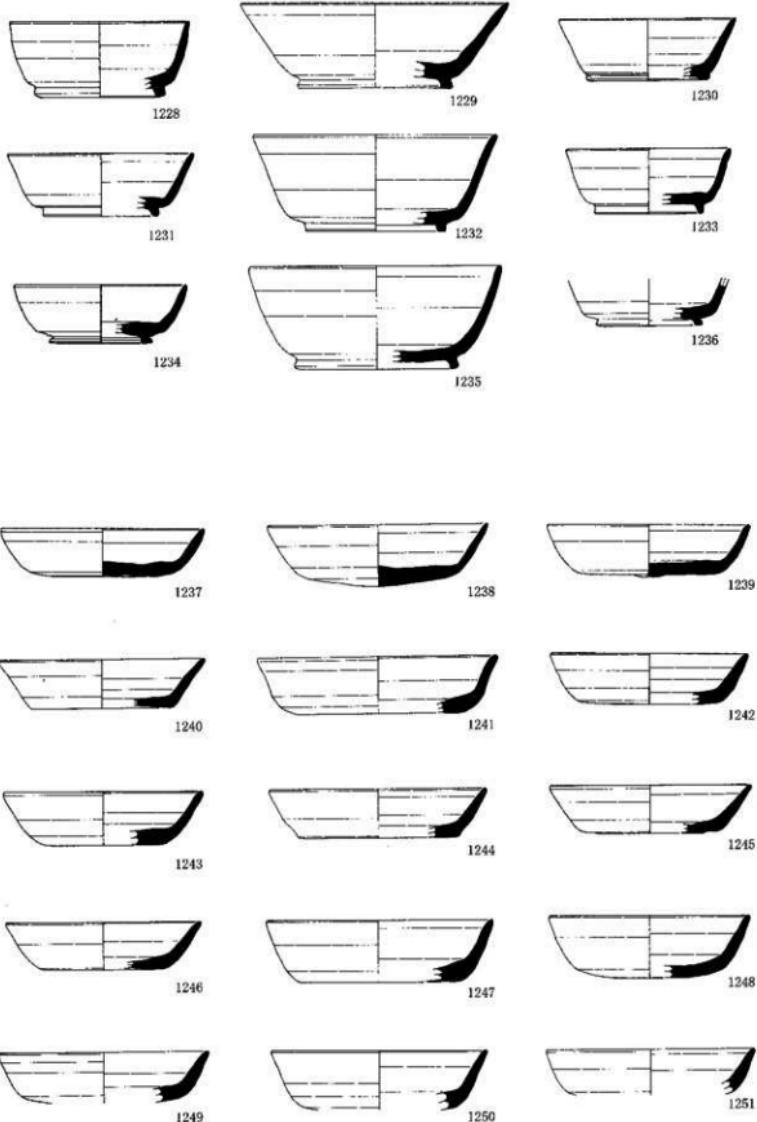
圖面一〇四

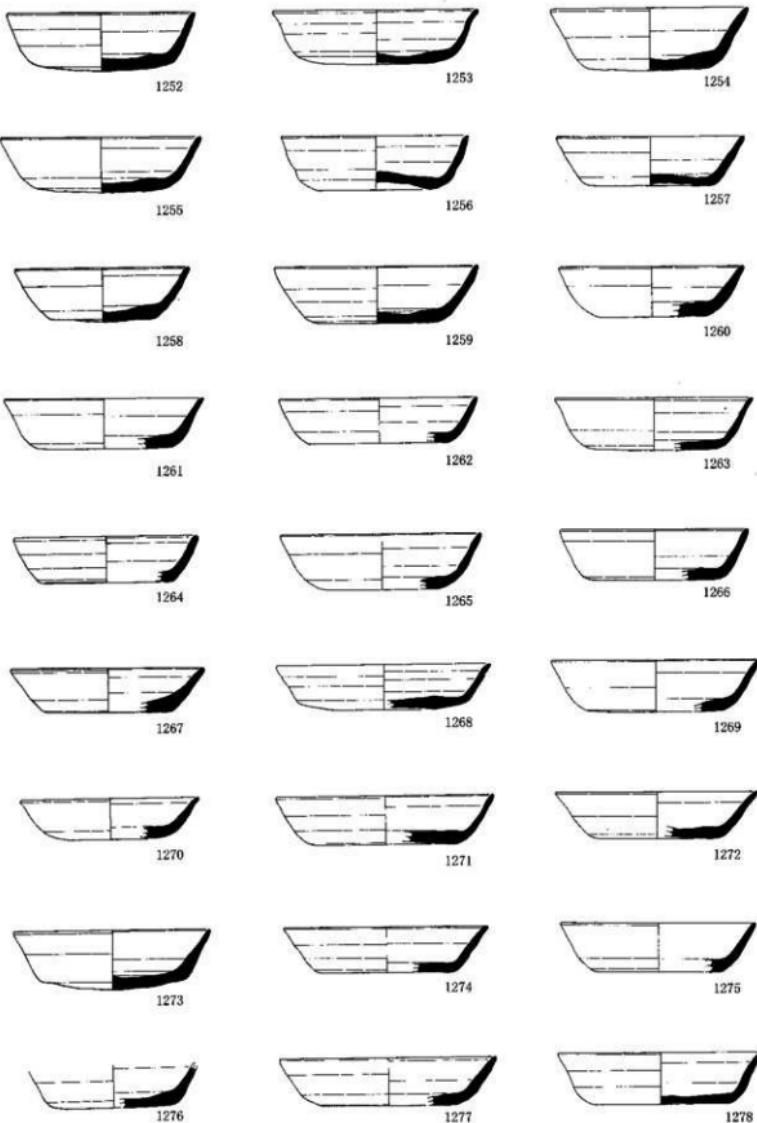
遺物実測図

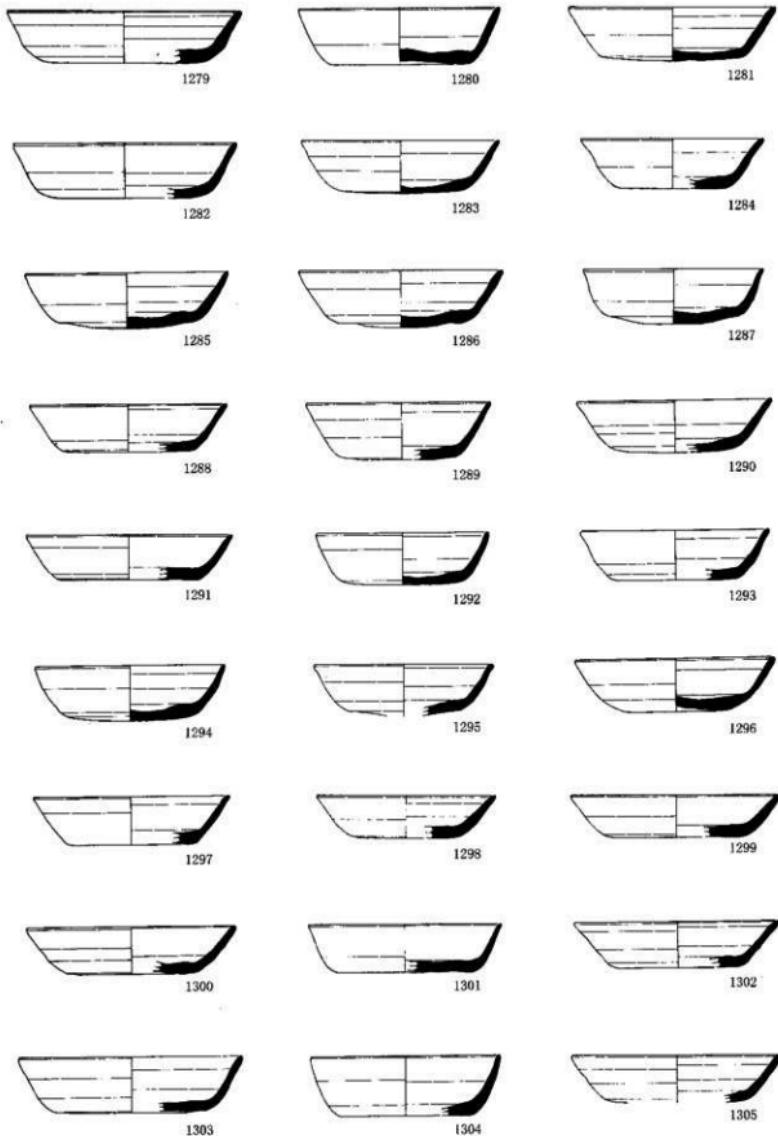
東木津遺跡
山崎地区



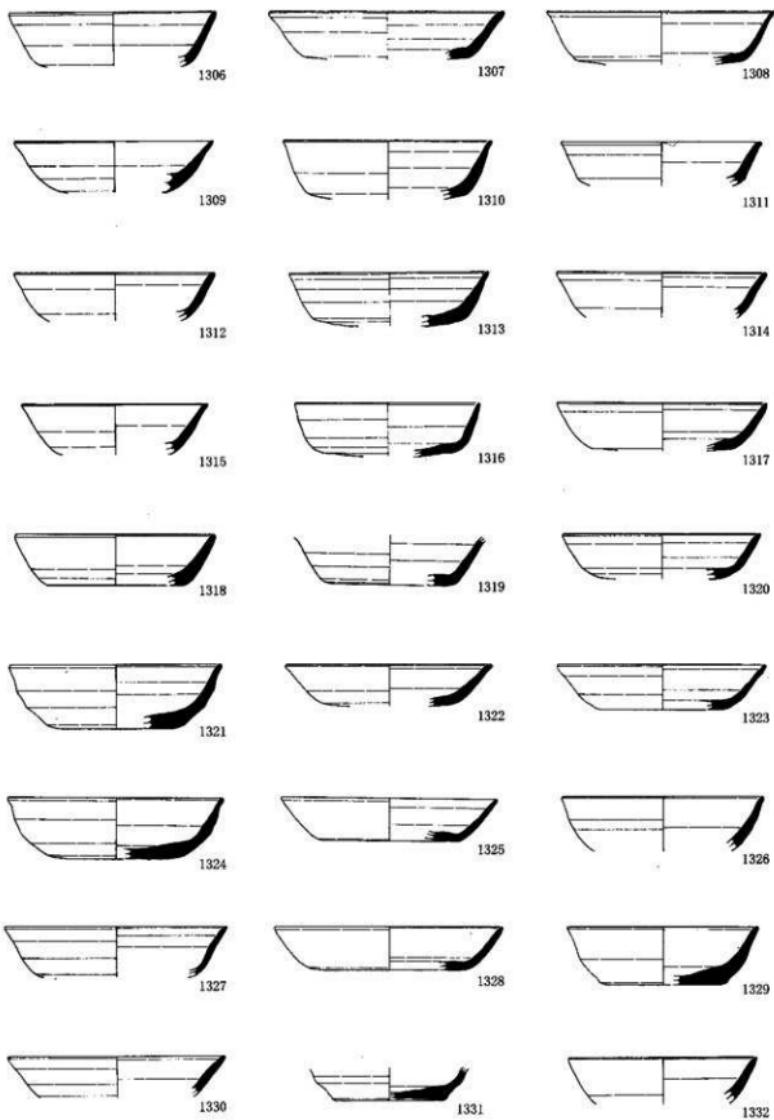
圖面一〇五 遺物実測図 東木津遺跡 山崎地区

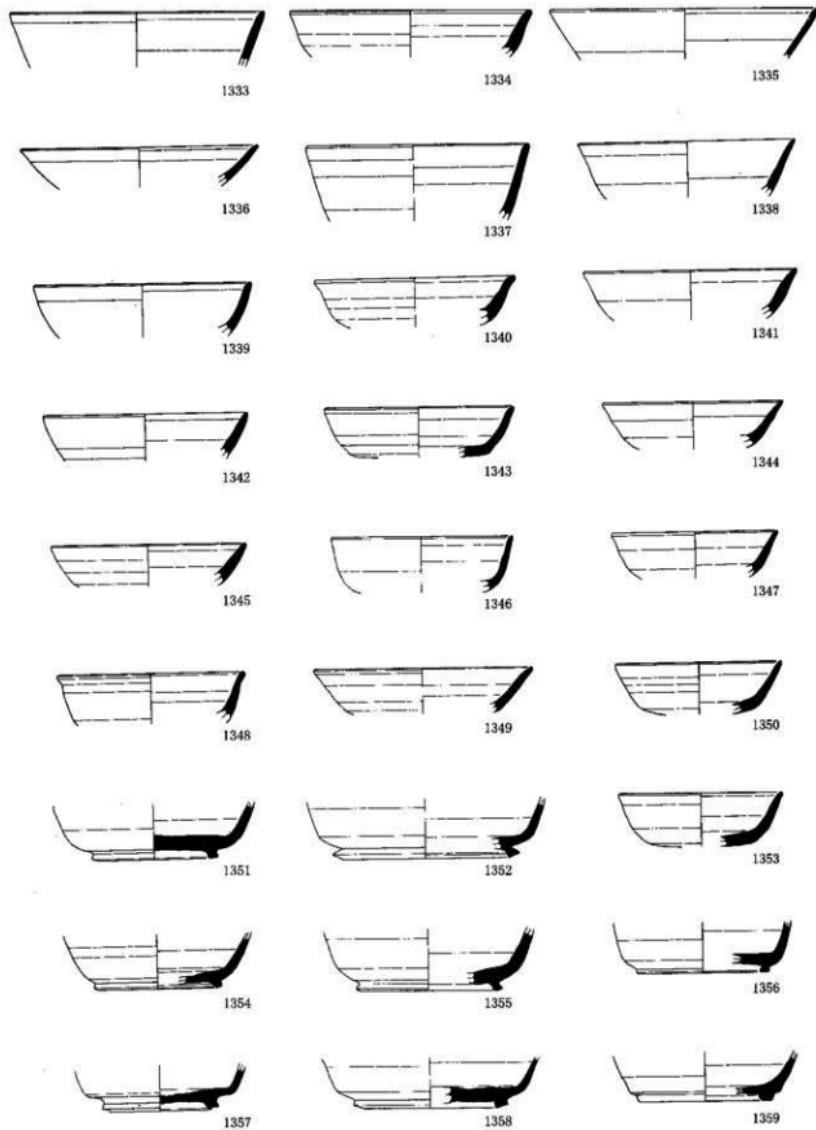




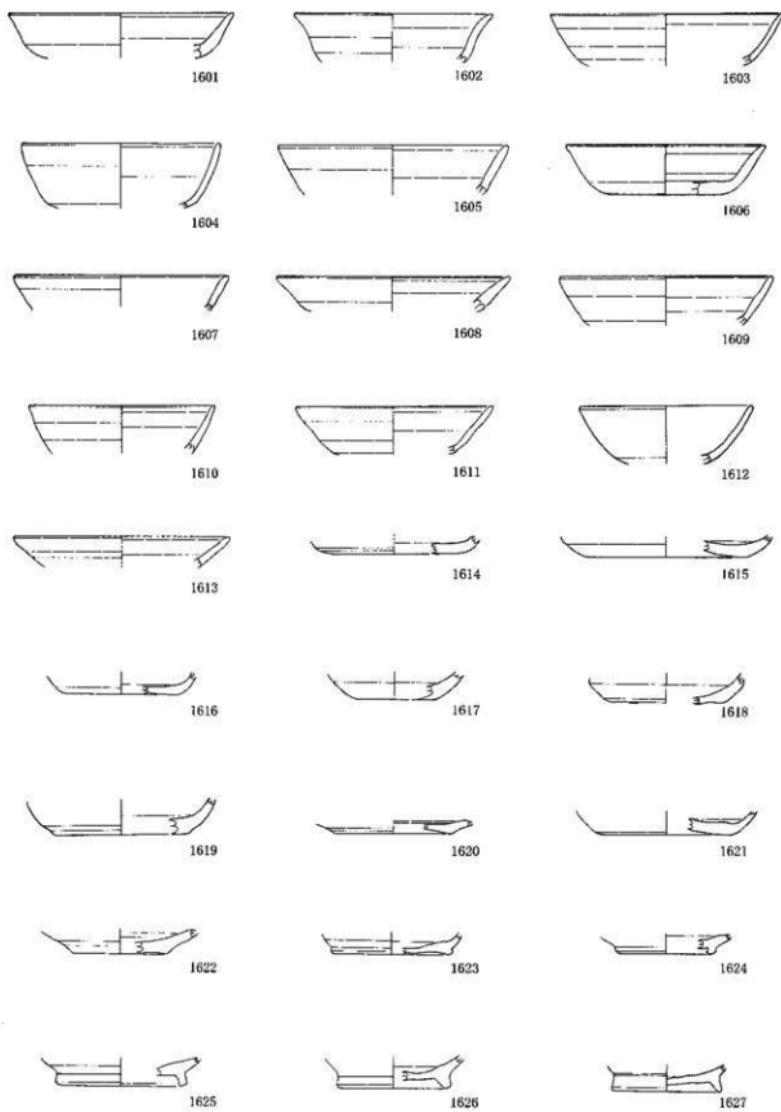


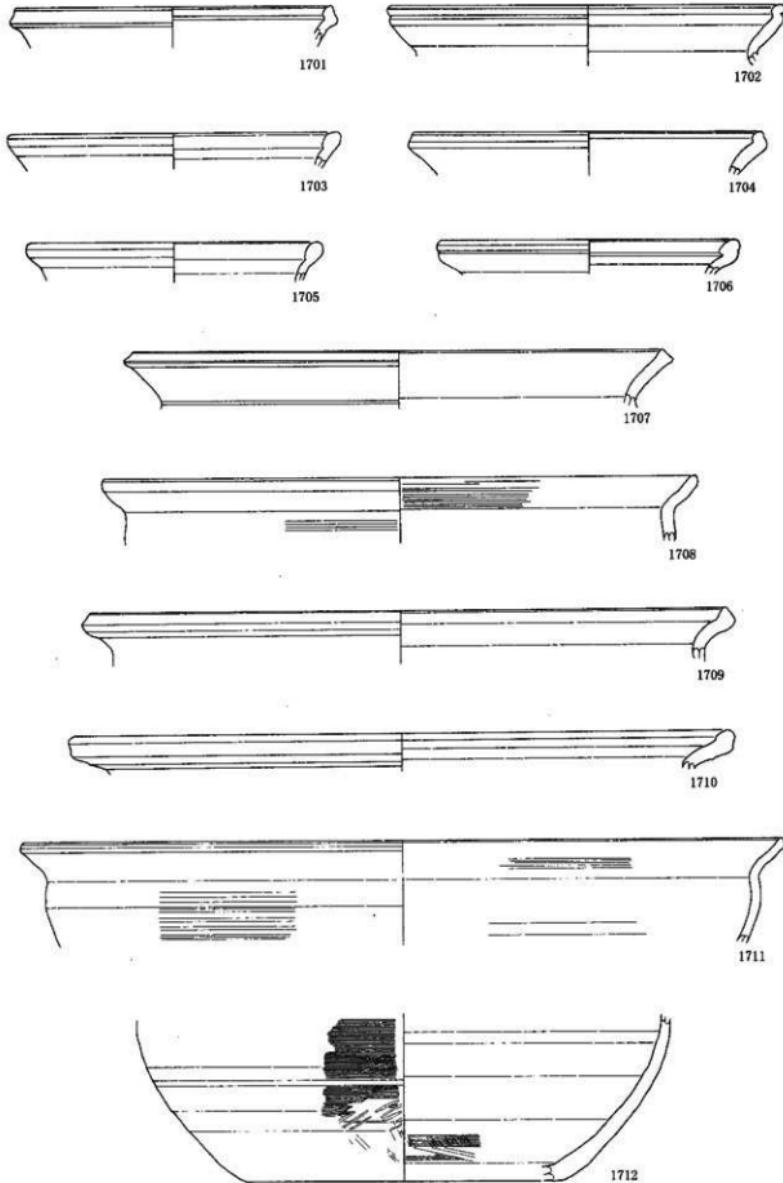
図面一〇八 遺物実測図 東木津遺跡 山崎地区





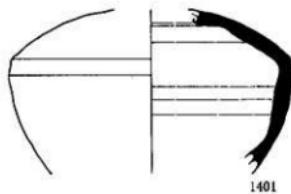
図面一〇 遺物実測図 東木津遺跡 山崎地区



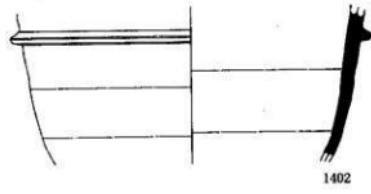


圖面一二 遺物実測図

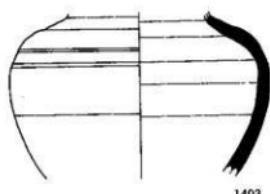
東木津遺跡 山崎地区



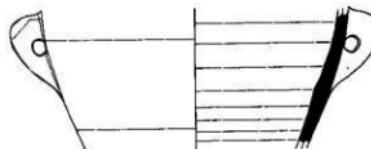
1401



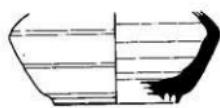
1402



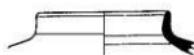
1403



1404



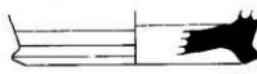
1405



1406



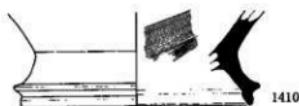
1407



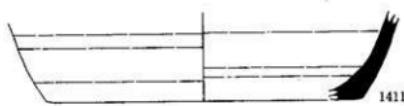
1408



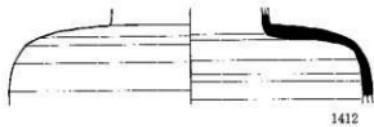
1409



1410



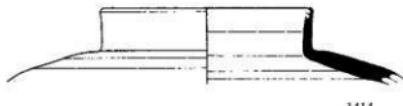
1411



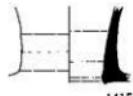
1412



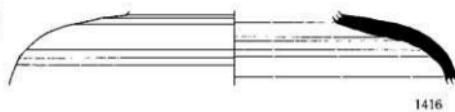
1413



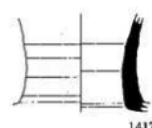
1414



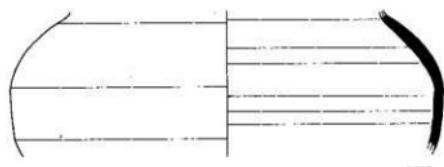
1415



1416



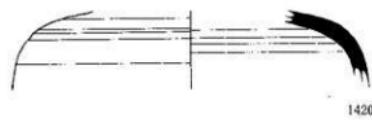
1417



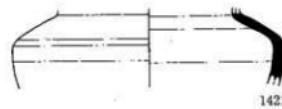
1418



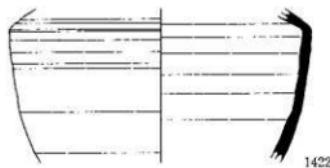
1419



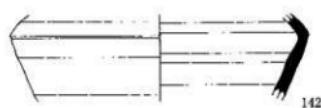
1420



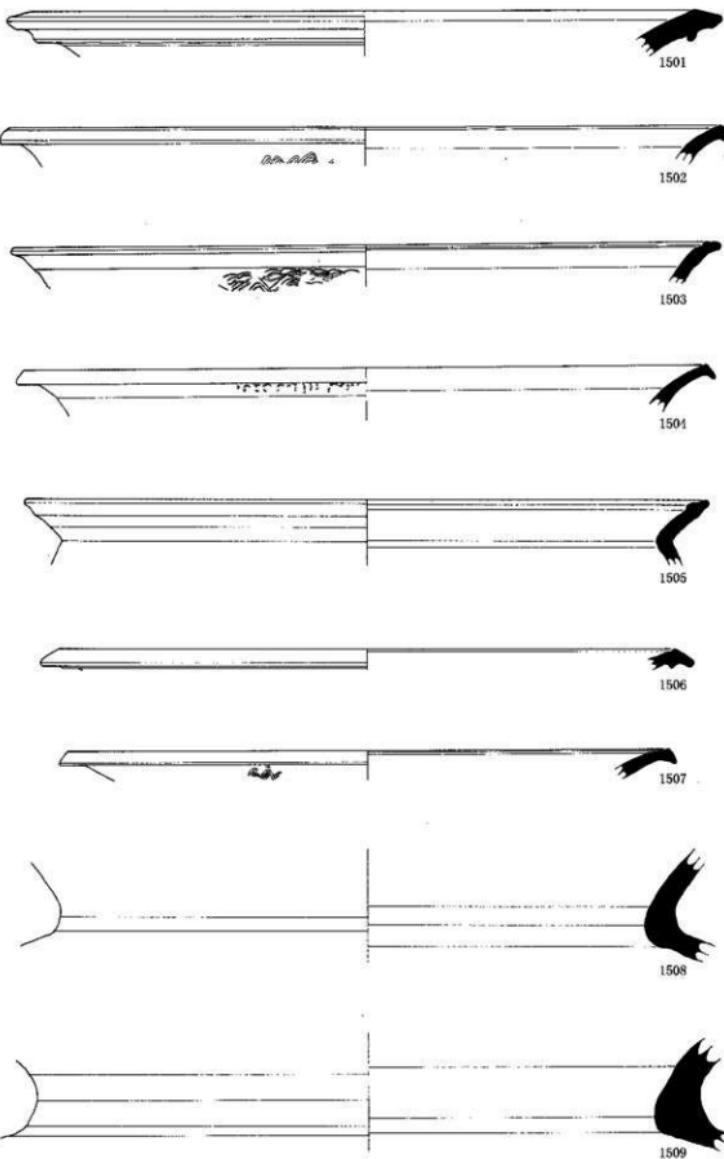
1421

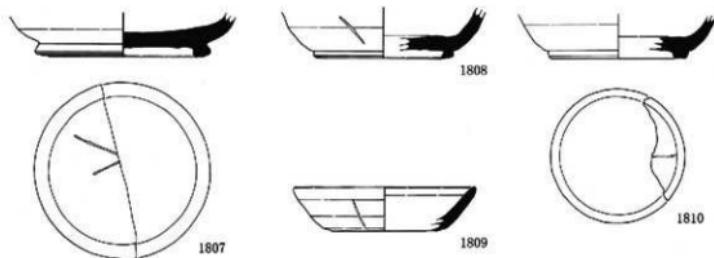
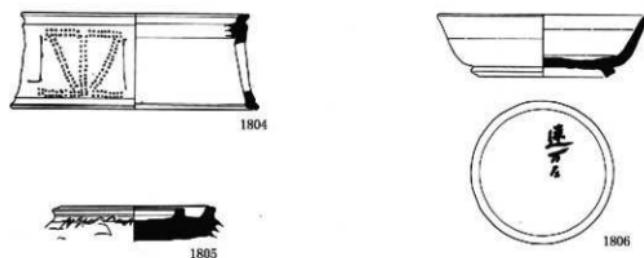
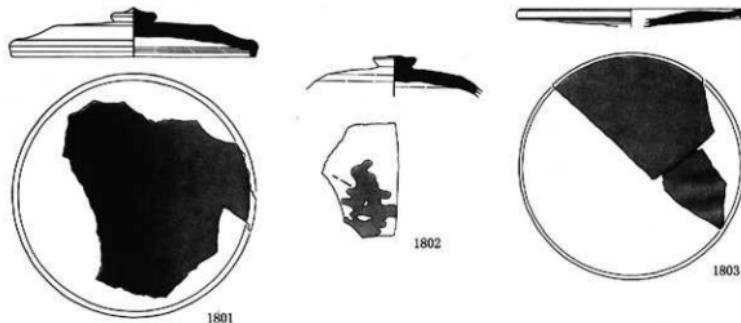


1422



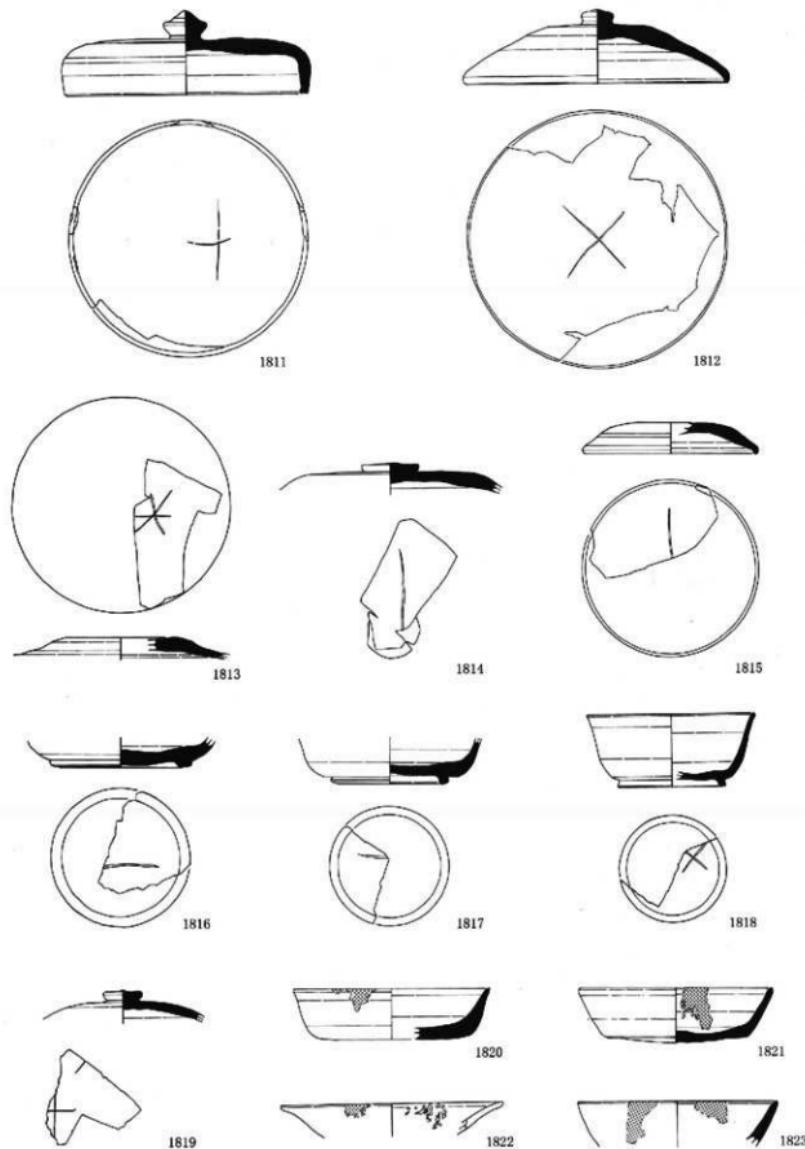
1423





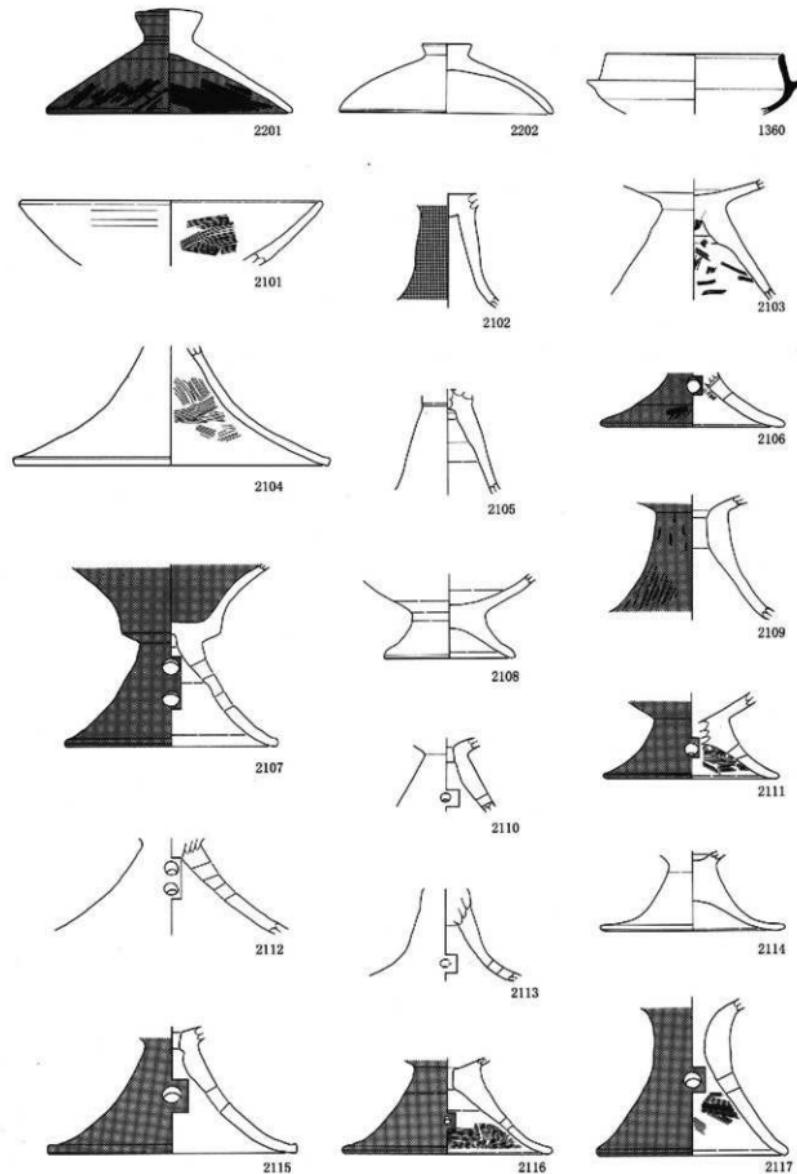
古代 墨書き土器 (1806), 円面碗 (1804・1805), 楕用碗 (1801～1803), ヘラ記号 (1807～1810)

図面一六 遺物実測図 東木津遺跡 山崎地区



古代 ヘラ記号 (1811~1819), 灯明皿 (1820~1823)

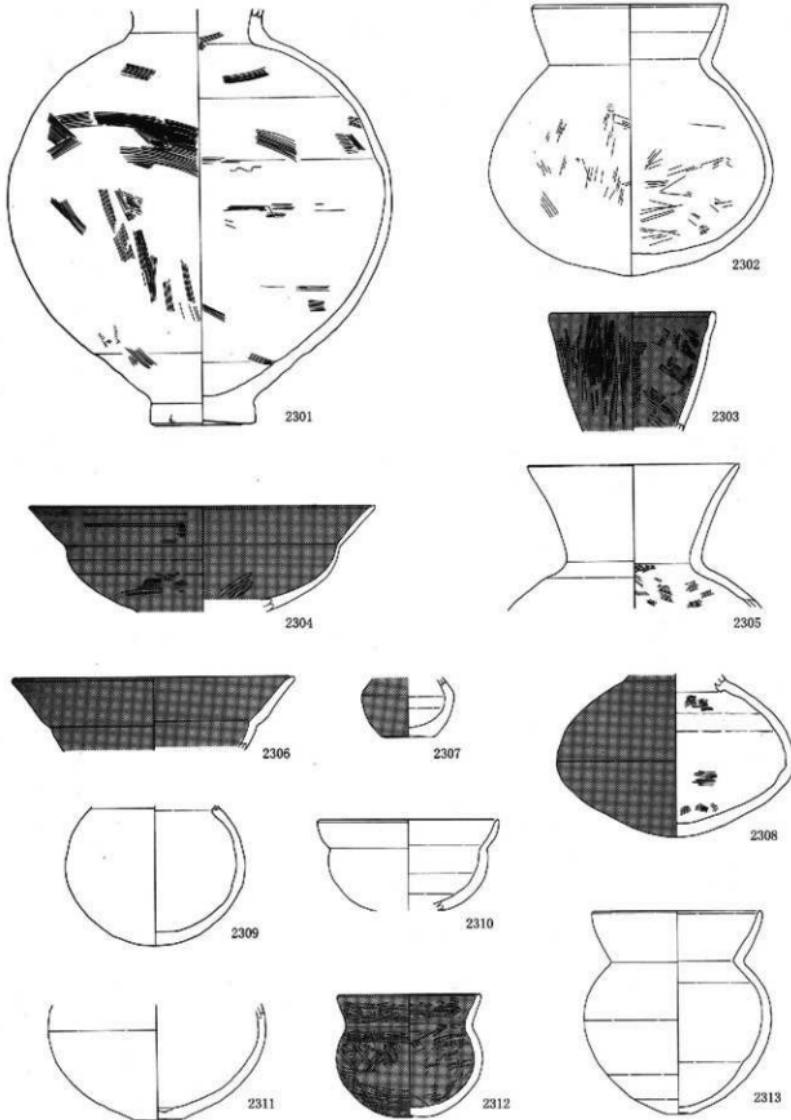
縮尺 1/3



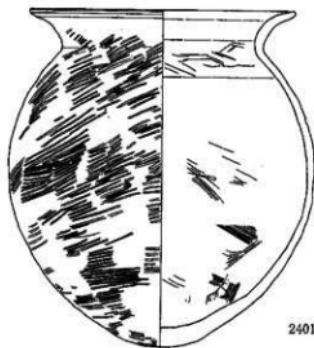
古墳時代 須恵器 杯身 (1360), 土師器 蓋形土器 (2201, 2202), 高杯, 器台 (2101~2117)

縮尺 1/3

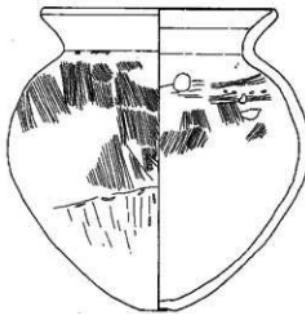
図面一八 遺物実測図 東木津遺跡 山崎地区



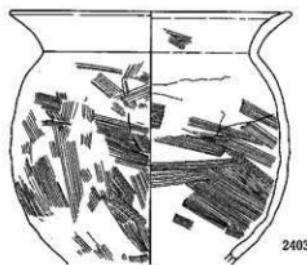
圖面一九 遺物実測図 東木津遺跡 山崎地区



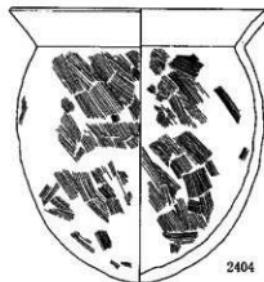
2401



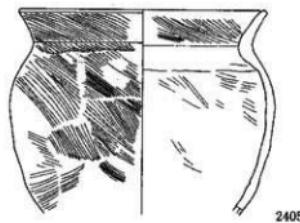
2402



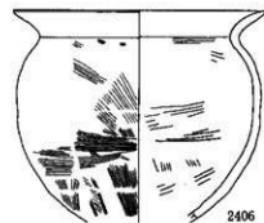
2403



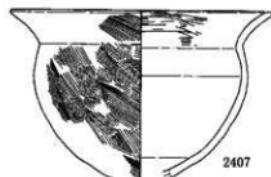
2404



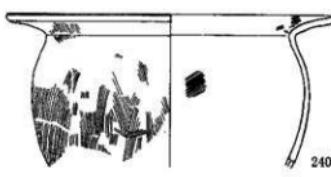
2405



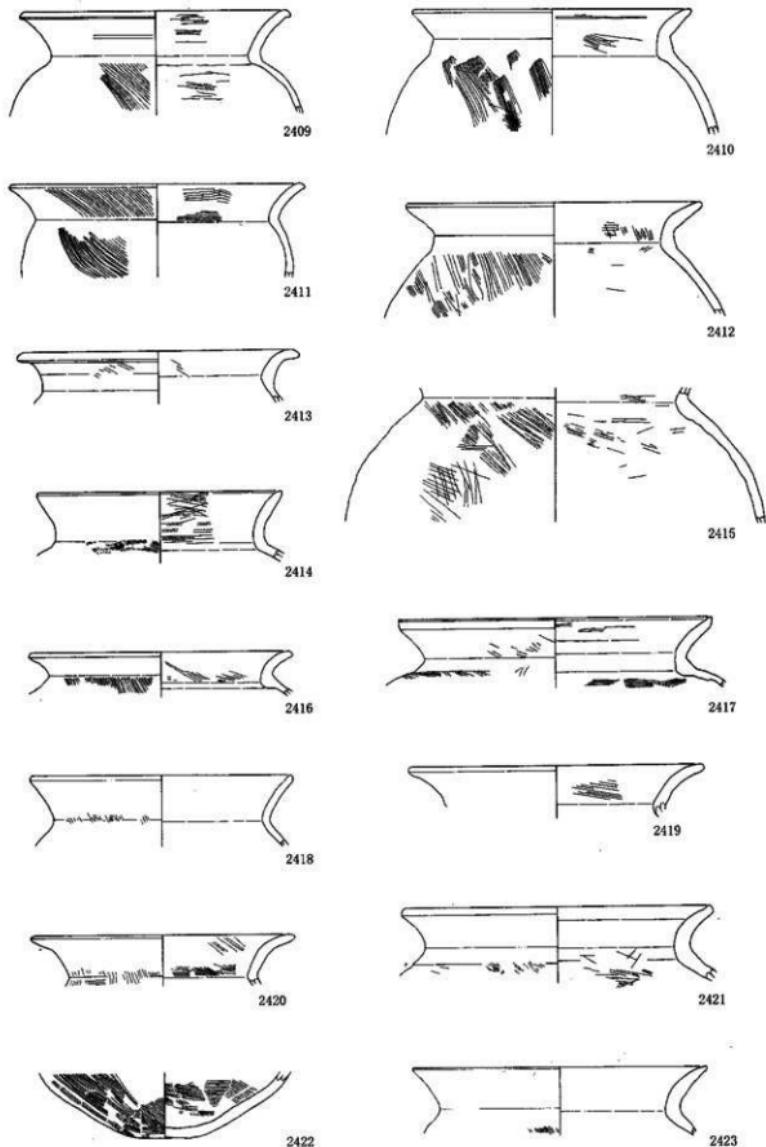
2406

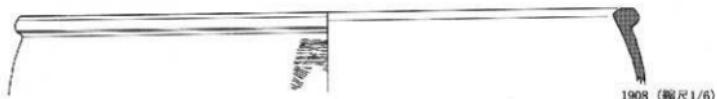
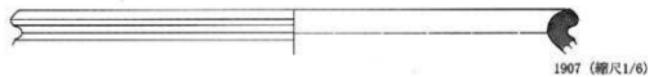
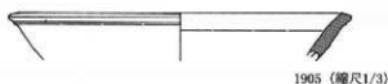
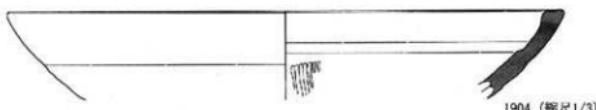
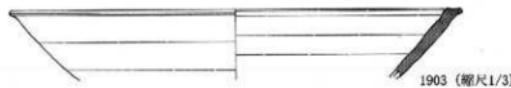


2407

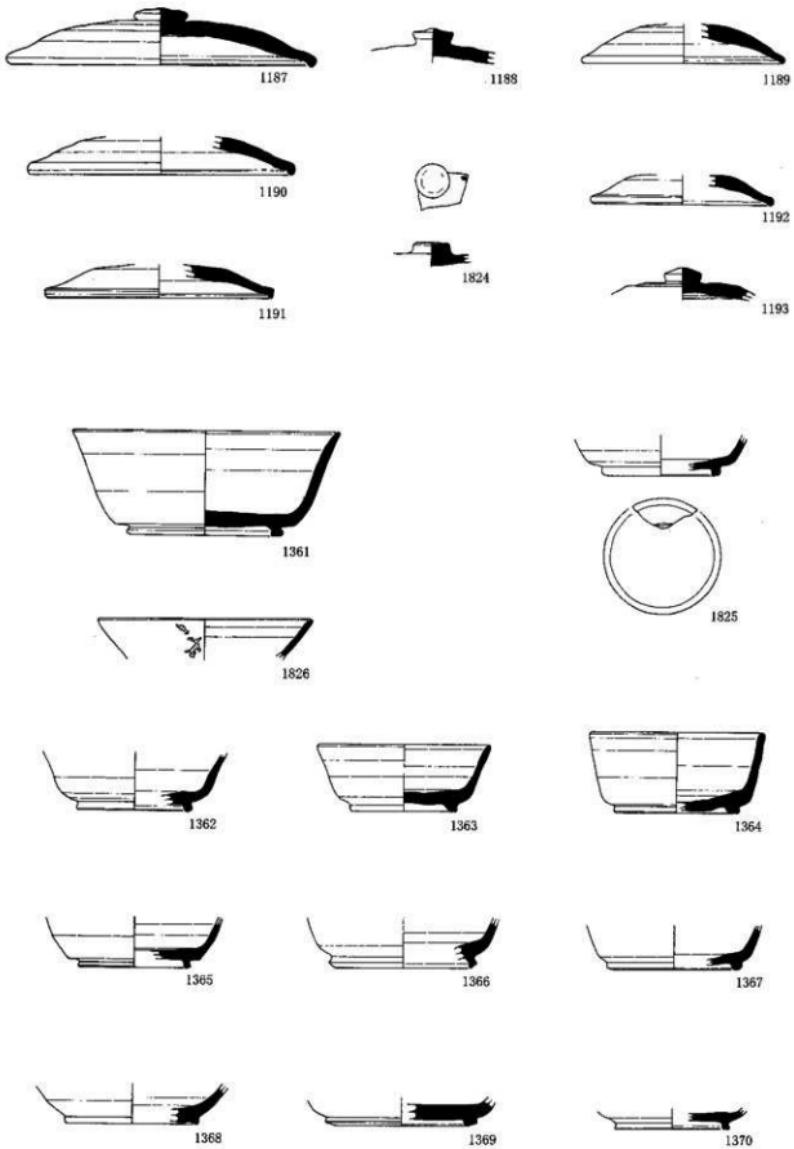


2408





中世 珠洲焼 すり鉢 (1901~1906), 大甕 (1907・1908)



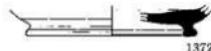
古代 紋章器 蓋、杯、墨書き土器 (1824), ヘラ配号 (1825), 灯明皿 (1826)

縮尺 1/3

圖面二二三 遺物実測図 東木津遺跡 丹羽地区



1371



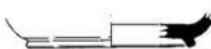
1372



1373



1374



1375



1376



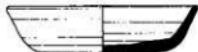
1377



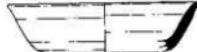
1378



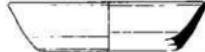
1379



1380



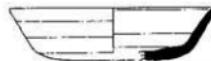
1381



1382



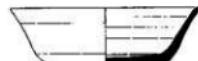
1383



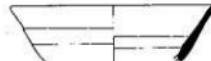
1384



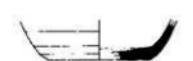
1385



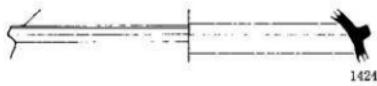
1386



1387



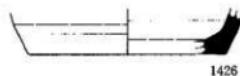
1388



1424



1425



1426

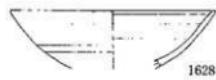


1427

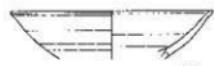


1428

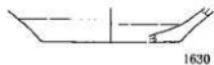
圖一二四 遺物実測図 東木津遺跡 丹羽地区



1628



1629



1630



1631



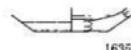
1632



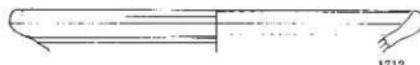
1633



1634



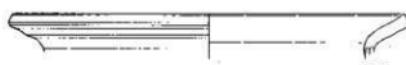
1635



1713



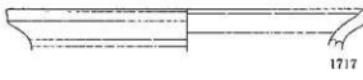
1714



1715



1716



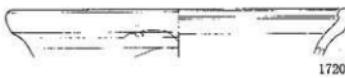
1717



1718



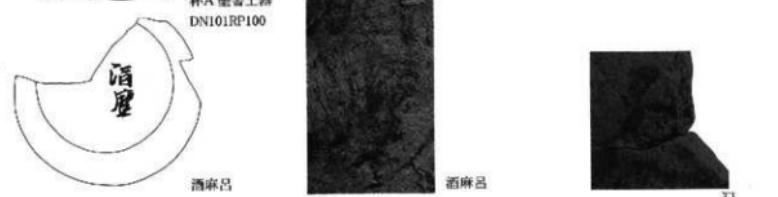
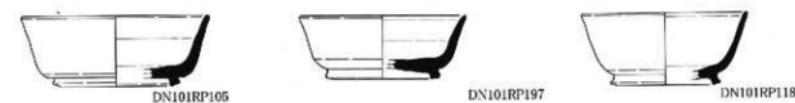
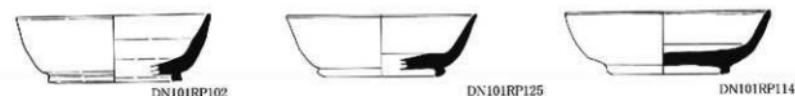
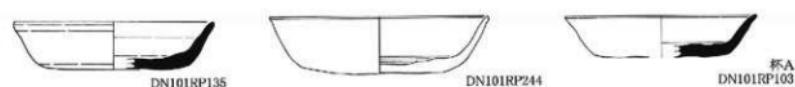
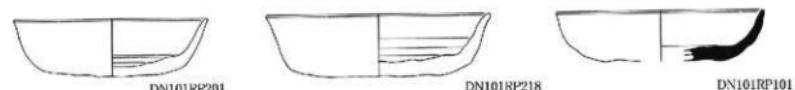
1719



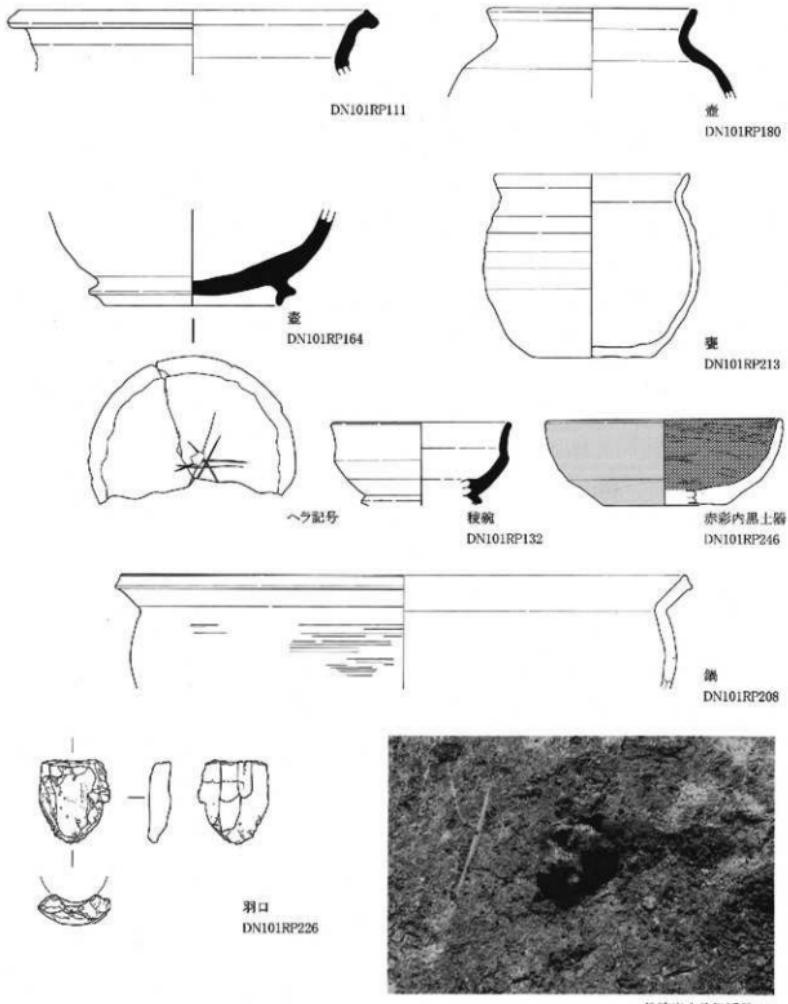
1720



1721



圖面一二六 遺物実測図 出来田南遺跡 黒川仏壇店地区



図版二〇一 東木津遺跡 山崎地区



東木津遺跡 山崎地区 調査区全景（上空南より）



東木津遺跡 山崎地区 調査区遠景（上空東より）



掘立柱建物 検出状況



作業風景



遺構検出状況

図版二〇三 東木津遺跡
諸橋地区



作業風景



作業風景



調査区全景
(南から)



調査地区全景（正面にみえる集合住宅が、平成11年度大和ハウス地区 南西より）



重機掘削風景（東より）



遺構精査風景（掘立柱建物址 S B 1 周辺）



ラジオコントロール・ヘリコプターによる撮影風景



掘立柱建物SB 1検出状況（南より）



掘立柱建物SB 1周辺の検出状況（西より）



掘立柱建物 S B 1 柱穴と遺構検出状況



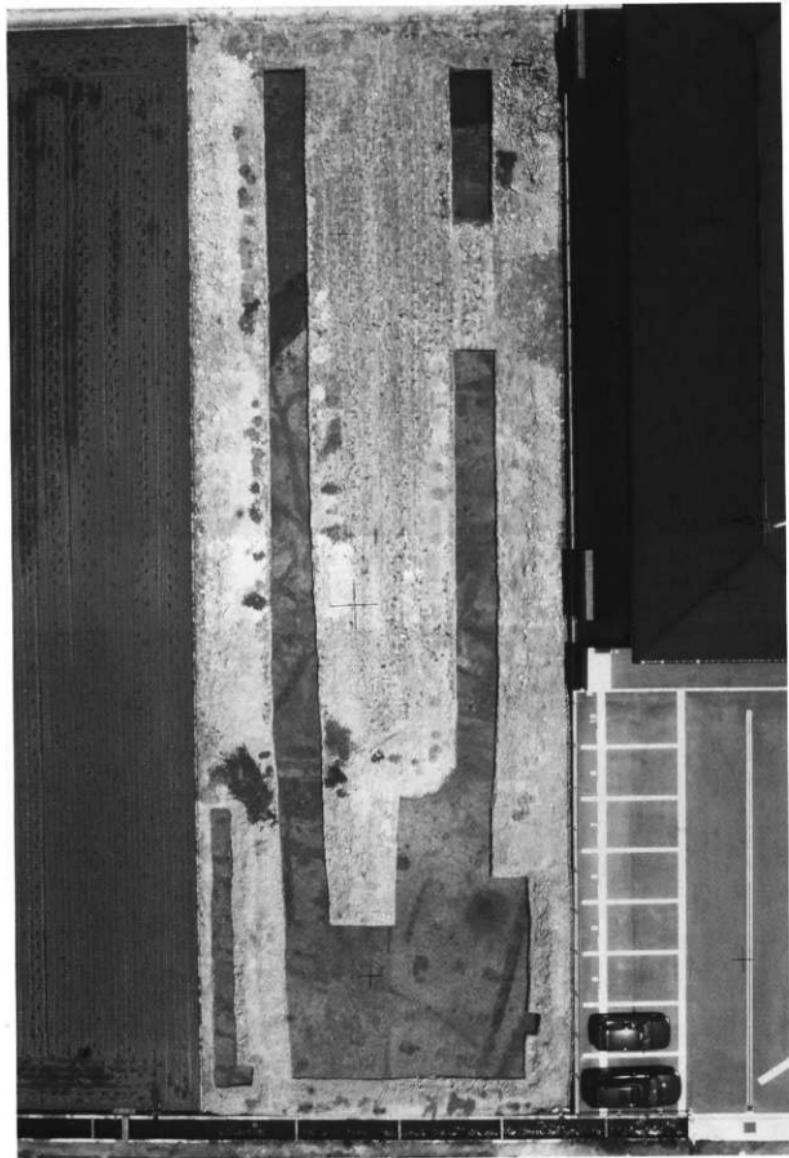
トレンチ2 遺構検出状況（西より）



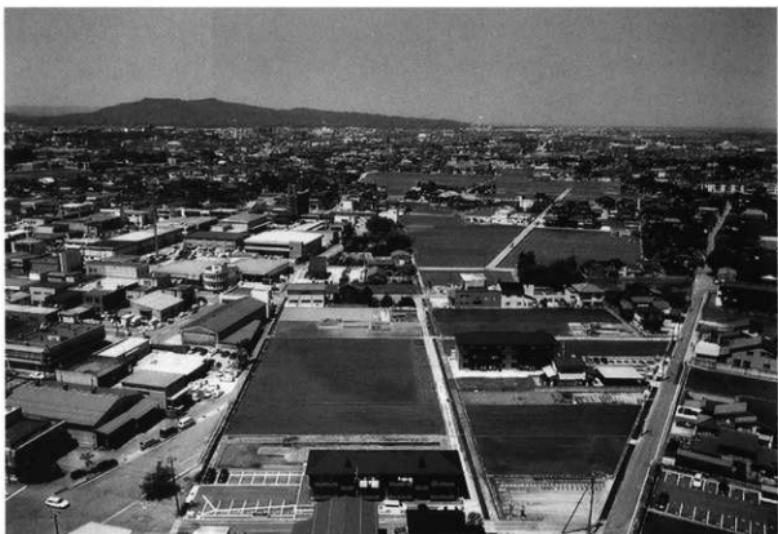
トレンチ2 遷構検出状況（西より）



トレンチ3 遷構検出状況（西より）



調査地区全貌（遺構検出時）



調査地区遠景（南より）



調査地区遠景（南東より）



調査地区全景
(東より)



重機掘削風景
(東より)



遺構検査風景

圖版二一二 五十里西遺跡 谷口地區



図版二二三
藏野町遺跡 武田工務店地区



調査地区全景
(東より)



重機掘削風景
(南より)



試掘坑土層断面近景



調査地区全景
(北東より)



重機掘削風景
(西より)



武都坑土層断面近景



調査地区全景
(北東より)



重機掘削風景
(西より)



試掘坑土層断面近景

図版二一六 出来田南遺跡 南地区



調査地区全景
(北東より)



重機掘削風景
(北より)



試掘坑土層断面近景

圖版二二七 越中國府関連遺跡 堀地区



調査地区全景
(西より)



重機掘削風景
(東より)



試掘坑土層断面近景

図版二二八 越中国府関連遺跡 寺嶋地区



調査地区全景
(東より)



重機掘削風景
(西より)



試掘坑上層断面近景

図版二二九 鶴北新遺跡 サンバリー高岡病院地区



調査地区全景
(北より)



重機掘削風景
(東より)



試掘坑全景



調査地区全景
(北東より)



重機掘削風景
(北より)



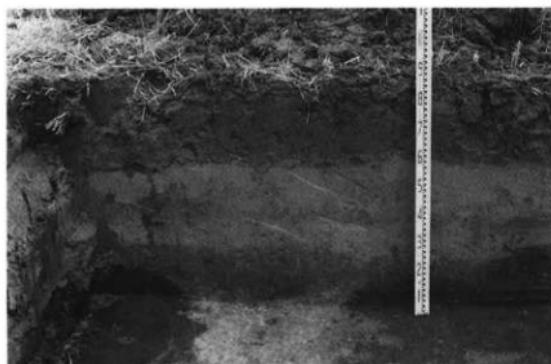
試掘坑土層断面近景



調査地区全景
(北西より)



重機掘削風景
(西より)



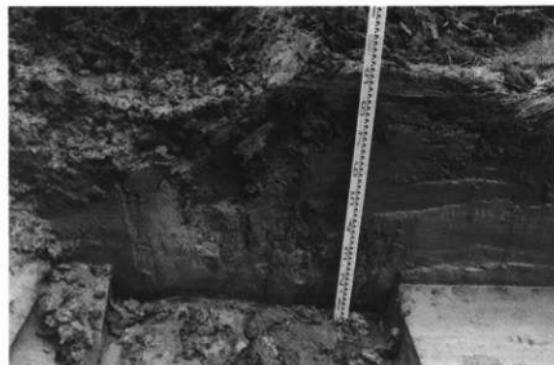
試掘坑土層断面近景



調査地区全景
(南西より)



重機掘削風景
(西より)



試掘坑土層断面近景



調査地区全景
(東より)



重機掘削風景
(北西より)



試掘坑土層断面近景



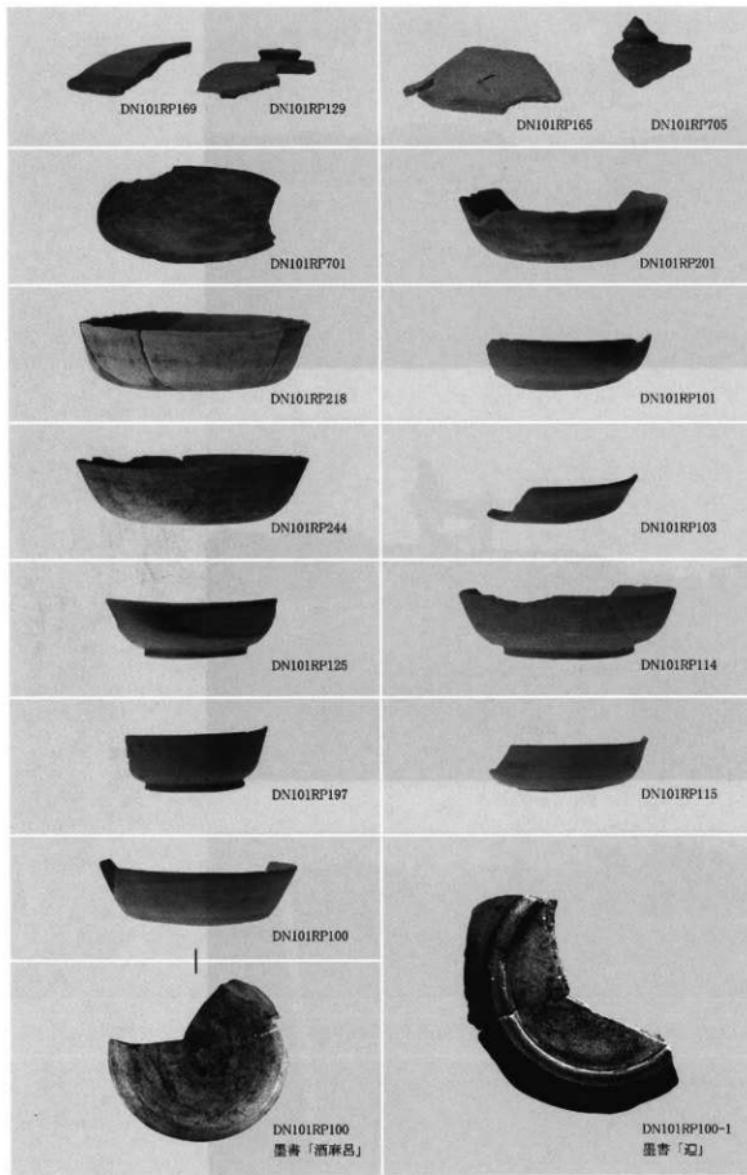
調査地区全景
(南東より)

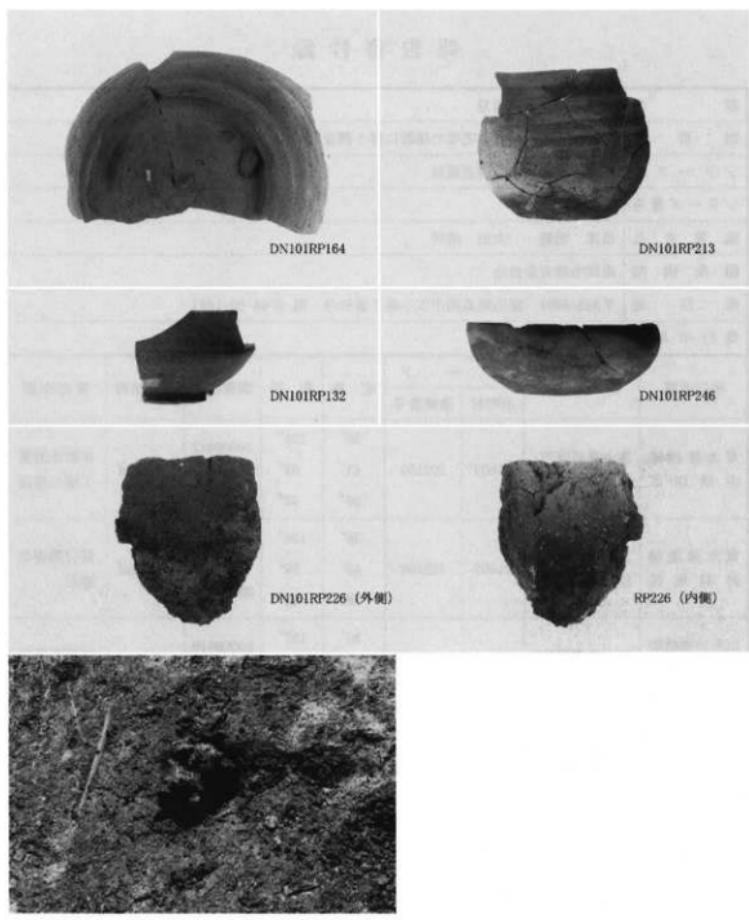


重機掘削風景
(北東より)



試掘坑土層断面近景





報告書抄録

書名	市内遺跡調査概報Ⅺ							
副書名	平成12年度 個人住宅等の建設に伴う調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第47冊							
編著者名	根津 明義 太田 浩司							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号 TEL 0766-20-1463							
発行年月日	西暦2001年3月16日							
所取遺跡	所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東木津遺跡 山崎地区	富山県高岡市 佐野地内	01602	202150	36° 43' 36"	136° 59' 42"	20000612 ~ 20000811	700m ²	自動車整備 工場の建設
東木津遺跡 丹羽地区	富山県高岡市 佐野地内	01602	202150	36° 43' 36"	136° 59' 42"	20000510 ~ 20000609	150m ²	資材販場の 建設
出来田南遺跡 黒川仏壇店 地区	富山県高岡市 出来田地内	01602	202139	36° 43' 34"	137° 02' 00"	20000519 ~ 20001130	302m ²	事務所兼倉 庫の建設
その他の地区	富山県高岡市 内	01602				20000417 ~ 20001130	計 2,638m ²	住宅建設他
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
東木津遺跡 山崎地区	官衙	古墳時代前期, 奈良時代~平安時代 前期	掘立柱建物3棟 標址7条	土師器, 須恵器, 円面鏡, 紙書 土器				
東木津遺跡 丹羽地区	官衙	奈良時代~平安時代 前期	掘立柱建物1棟	土師器, 須恵器, 帆用鏡				
出来田南遺跡 黒川仏壇店 地区	官衙又は 集落	奈良時代~平安時代 前期	掘立柱建物1棟 溝	土師器, 須恵器, 帆用鏡, 羽口 墨書き土器, 鉄斧				
その他の 遺跡								

高岡市埋蔵文化財調査概報 第47冊
市内遺跡調査概報Ⅺ

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市庄小路7番50号

2001年3月16日

印刷所 キクラ印刷株式会社

富山県高岡市鍛錆町48-2
